

## 『逍遙遺稿』札記：シルレルとショオペンハウエルのこと及び張滋?について

著者	二宮 俊博
雑誌名	椋山女学園大学研究論集 人文科学篇
号	33
ページ	11-38
発行年	2002
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1454/00001287/">http://id.nii.ac.jp/1454/00001287/</a>

## 『逍遙遺稿』札記

——シルレルとシヨオペンハウエルのこと及び張滋昉について——

二 宮 俊 博

最近 明治の漢詩人や漢学者を取り上げた書物がしだいに目につくようになった。九八年には町田三郎氏の『明治の漢学者たち』(研

文出版)に続いて三浦叶氏の『明治の漢学』及び『明治漢文学史』の両著(汲古書院)が上梓され、九九年には戸川芳郎氏の編になる『三島中洲の学芸とその生涯』(雄山閣)、村山吉廣氏の『漢学者はいかに生きたか——近代日本と漢学——』(大修館)などが刊行された。このうち村山氏の著書には「恋に生き恋に死す」と副題を附して、生前相識る機会を得なかった島崎藤村が秀才の香骨を憐れむ「哀歌」を捧げた中野逍遙のひたむきな恋情を詠じた詩業とその短い生涯とが、中国の古典のみならず江戸や明治の漢学に造詣の深い著者によって改めて世に紹介されている。私も『逍遙遺稿』正外二編を繙いて、これまで幾つかの覚書をまとめてきたが、今回も副題に示した事柄について私見を記しておきたい。

なお、本稿は平成十三年度相山女学園大学学費Bによる研究報告の一部である。

### ○シルレルとシヨオペンハウエル

明治二十三年(一八九〇)一月、「国民の友」第六卷第六十九号附録に発表された森鷗外の「舞姫」のなかに、主人公太田豊太郎の伯林はモンビシュウ街の客舎における読書生活の一端について述べて、「シヨオペンハウエルを右にし、シルレルを左にして、終日兀坐」している旨、記された箇所がある。ひとり太田豊太郎のみならず、シルレル(Friedrich von Schiller 以下、本文ではシラーと表記)やシヨオペンハウエル(Arthur Schopenhauer 以下、本文ではショーペンハーアー)の名は、鷗外以後の明治の知識青年にとって単なる教養というに止まらず、自らの生き方を模索する上で大きな意味を有するものであった。

このうち、シラー(一七五九―一八〇五)に関して、鷗外は「舞姫」発表以前、吾醒庵主人こと遠湖内田周平訳の「菩提樹畔の逍遙」(「国民の友」八月・九月)を評した「国民の友」菩提樹畔の逍遙」細

評』を独酔庵主人の筆名で明治二十二年十月刊『文藝志がらみ草紙』第一号に書き、「軍醫シルレルノ事ヲ記ス」と題する記事を侘然居士の筆名で同誌第一号および翌二十三年三月の第六号にのせており、未完に終わったが二十四年十一月から二十五年にかけて「シルレル傳」を「早稲田文学」の第三号から五・七・八・十一・二十四号と断続的に掲載している。

そもそも独逸の詩人・劇作家シラーの名がわが国へ最初に紹介されたのは、明治四年（一八七二）に出た敬字中村正直の『西国立志篇』に始まるとされ、十三年（一八八〇）十二月には『ウィリアム・テル』の翻訳『瑞西獨立自由の弓弦』が出た。これは自由民権運動の潮流に棹さすもので、他にもテルの訳が出ている。その後、二十二年十月に博文館から刊行された柴山北村三郎編『世界百傑傳』の第七編には「芸徳ノ傳」に附して「西爾兒ノ傳」が添えられ、シラー伝として最初のものと言われている。<sup>注1</sup>二十三年一月には当時二十一歳の巖谷小波（季雄）が「ゴエター氏とシルレル氏」を『六合雜誌』第一〇九号に載せた。これは同誌第一〇六号（二十二年十月）から掲載の「ゴエター傳」の一部である。二十六年三月には同じく博文館から「寸珍百種」第貳拾四編として連山人・霧山人共撰の『獨逸六大家列傳』が出版され、そのなかにもシルレル伝が収められた。なお、連山人は巖谷小波、霧山人は宮崎出身の坂田孫四郎のことで、小波は早くに訓蒙学舎でドイツ語を習い、さらに独逸学協会学校普通科に進んだ。後に中退はしたものの専修科でも学んでおり、霧山人の経歴はよくわからないが、やはり独協の出身であったという。<sup>注2</sup>ここにいう「六大家」とは、クロップストック・ウーランド・レッシング・ヘルデル・ゴエター・シルレルの六人を指す。このうちゴエター伝は先に述べた「六合雜誌」に、ウーランド伝は二十三年五

月の「日本之文華」第一冊第十号及び同年七月の第一冊第十三号に、クロップストック伝は霧山人との共著で二十四年十二月から翌年一月にかけて「六合雜誌」第一三二号及び第一三三号に、またヘルデル伝の初回は二十五年十月の「城南評論」第八号に掲載された。ちなみに「城南評論」の同号には、狂殘子こと狂骨子中野逍遙と残月子佐々木信綱との共著になる「雨夜文談」が掲載されている。

さて、明治十六年（一八八三）八月末に十七歳で上京して以来、駿河台の成立学舎で英書を学び、翌十七年九月大学予備門に入学、二十三年六月に第一高等中学を卒業後、帝国大学文科大学の漢学科に進んだ逍遙中野重太郎も高等中学在学中の十九年秋頃からドイツ語を習い始め、やがてシラーの作品に魅せられた一人で、彼に多大の関心を抱き、その人となりを敬慕崇拜するようになった。明治二十七年（一八九四）十一月逍遙が二十八歳で歿した後、一周忌を期して学友宮本正貫・小柳司氣太らによって編纂された『逍遙遺稿』の正編には「中野文學士小傳」が掲げられているが、それには、

又嗜劍又嗜詩、好誦西人志留禮流翁詠、自期以翁。

（又た劍を嗜み詩を嗜んで、好んで西人志留禮流翁の詠を誦し、自ら期すに翁を以てす）。

と述べられている。

かかる逍遙のシラーに対する傾倒ぶりをかなり具体的に伝えているのが、大学予備門以来の友人で法科大学を出た橋本夏男の「中野君志想ノ一斑」と題する追悼文（『逍遙遺稿』外編、雜錄所収）で、そこに次のような一節が見える。

……君ハ理想派ヲ以テ最モシルレルヲ慕フ余ハシルレルノ崇拜者ナリトハ君自ラモ謂ヒシ所ナリ獨リ詩ニ於テ之ヲ慕フノミナラス亦其氣質ヲモ愛セシニ似タリ嘗テ其友ニ寄スルノ書ニ曰ク

我思想の動く所の類似點をシルレルに求るに其傳に曰くカル大學の無味なる學科は氏の多情なる文學志想を満足せしむる能はず遂に學校を遁走せんとまで思ひ定めたり後氏は目的を變して醫學にうつり遁校の念を抑へたるも其過半の腦力は文學の爲めに奪はれたり千七百八十年カル校を出て萬事強制の羈束を脱せしより其反動より氏の行狀に著しき變動を來し借財も亦嵩みしかは『盜賊』といふ書を出版せしに非常の名を博しマンハイムの劇場にて演ずる事となり氏は演劇を見る爲めに職省に無届にて逃走せり先輩には不興を蒙り故郷には面白からぬ評あり云々此事ありてこそシルレルなれト以テ君力平素ノ境遇ト感想ノ一斑ヲ伺フニ足ル

※もと八に作る。今、岩波文庫本に従つて改む。

逍遙が友に寄せた手紙の中に引くシラーの伝というのは、その文意や措辞からして、おそらくは先に挙げた連山人・霧山人共撰『逍遙文壇六大家列傳』所収のシルレル伝に拠るものであらう。

その「カル校の組織」と上欄に標題がつけられている箇所には、……併し乍ら氏は神學を好むの念を割いて、余儀なく此校に移りしものなれば、當初より不平を制して入學し、日々法學の課程に就くと雖も、此無味なる學科に於ては、氏の多情なる文學志想を満足せしむる能はず、遂に或る二三の同志と計り、學校より遁走せんと迄思ひ定めたることもありき。

併るに千七百七十五年、校舍スツツガルドに移轉するに際し、氏は目的を變更して醫學に移り、以て漸く遁校の念を抑制したりしが、之れとて全く氏の精神を牽留するに足らず、其過半は文學の爲に奪はれたりき。然り而して此カル校は後日非常に進歩し、ヨゼフ帝より高等カル學校として、三分科を有する大學

の列に加へられたり。

とあり、以下「氏初めて社會に出づ」として、

千七百八十年十二月十四日出度くカル校を卒業して、直にスツツガルドに在る近衛兵營の軍醫補に任命され、十八グルデンの月給を得て、初めて獨立の生活を味ふことなりしが、此職務の氏に適當せるや否やハ暫く措き、其事務甚だ繁激ならざりしかバ、傍ら其好める文學に従事するを得たり。

続いて「初めて著作を公にす」として、

扱氏ハ今日に至る迄、嚴格なる校則に束縛され、万事壓制の下に在りし身の、今や突然自由なる世路の潮流に游泳することとなり、其反動より氏の行狀に著しき變更を來たし、些細の俸給ハ其消費を充たす能はず、從て借財も亦嵩みしかバ、彼のRecher (盜賊) を出版して其を補はん<sup>(ツマ)</sup>とせしも、氏の名聲未だ現ハれざるの當時に在りてハ、之れが金主となるもの無く、止を得ず尙借財を重ね、遂に千七百八十一年の夏、自費を以て之を上梓し、其表紙にハ艸花を飾捺して、盜賊カル、モールを現はし、塔内より引出せる父の目前にて、復讐を誓ふの圖を畫けり。

さらに「氏潜かにマンハイムに赴く」として、

此著の世に出るや、豫想外の好評にて、フリードリヒ、シルレルの名ハ一時世上に囂しく、マンハイムの俳優鑑督ヘリベルト、フォン、ダルベルヒハ、氏に乞ふて之を舞臺に適當する様補助折衷し、マンハイムの劇場に於て演ずることとなり。氏ハ其自作の演劇を見んと欲し、休暇の許され<sup>(ツマ)</sup>らんことを恐れ、軍隊に無届にて、千七百八十二年マンハイムに來れり。一月の初舞臺にて、有名なるイツフランド、フランツ丈モオルに扮し

て非常の喝採を得、後至る處此曲を演ぜざるなく、「ロイベル」の曲を知らざるの人無きに至りしが、獨り古郷スツツガルドに於ては、甚だ面白からざる批評行はれたり。

と記されている。

もっとも、中野逍遙が好んで誦したという「志留礼流翁の詠」が実際にどういふ詩句や歌詞であつたのかは、現在では確かめようもなく、またシラーの影響が逍遙の詩文に如何に現われているかについて具体的にこれを云々することは甚だ難しいけれども、「それによつて自由の精神や多感な詩情をおおいに触発されている」ことは充分考えられ、逍遙はシラーと出会うことにより詩想を涵養するばかりでなく内心の衝迫を詠ずる端緒を得たのであらう。

文科大学漢学科の選科生で同期の本科生逍遙より三歳年下であつた嶺雲田岡佐代治（一八七〇—一九二二）は、逍遙歿後一周忌に彼の遺稿が刊行されたのを機に、「多憾の詩人故中野逍遙」と題する一文を明治二十八年（二八九五）十二月五日刊「日本人」第十一号及び同月二十日刊第十二号の二回に分けて掲載し、そのなかで逍遙と親しくなるに至つた経緯について触れ、

予もと逍遙と窓を同ふす而かも其初め未だ相知らざるなり。蓋し彼れ大學にありと雖とも、藻思ある彼の如きもの彼の無味なる日課に堪ゆる能はさりし乎將た碌々たる鶏群に伍するを欲せさりし乎、常に講筵に出てす。故に窓を全ふする三年、僅に一面の識あるに過ぎさりしなり。

云々と回想しているのだが、かくいふ嶺雲もほとんど授業で顔を合わせることもなかつた逍遙の胸中を推し量るなかで、カール校でのシラーの心境を想起したのではあるまいか。ちなみに、嶺雲は莊周が夢に胡蝶となる故事（『莊子』齊物論篇）に基づく栩々生の筆名で

政教社発行の『垂細亜』第六十六号（明治二十五年十一月二十一日刊）に掲載した「思ふ事」において、シルレルの Kage der Caes（ツェーレスの嘆き）の一節、

Deine Blumen kehren wieder,  
Deine Tochter kehren nicht.

という句に「花は再び咲くめれど、娘はつるに還りこじ」という訳を添えて引いており、この当時、嶺雲もシラーの詩を読んでいたことが窺える。

さらに想像を逞しくして言えば、逍遙が若きシラーの「自由への希求、束縛への反抗という浪漫的情熱」に共感し、それを我が身の上に取りつけて強く意識するようになったのは、上州館林出身で四歳年下の南条貞子（サダ）への報われぬ恋に身を焦がし、それゆえ故郷で自分の帰りを待っている幼馴染みの女性を振り捨てざるを得ず、ために郷党の不興を買い軋轢を生じたとする意識を持つてからのことではなかつたかと思われる。

明治二十五年（一八九二）作の「郷を発す」詩（『逍遙遺稿』正編）には、

十里家山不容吾	十里の家山	吾を容れず
又抱狂骨上征途	又た狂骨を抱いて	征途に上る
美人泣訴百年恨	美人泣いて訴ふ	百年の恨み
雲慘憺兮離亭晚	雲慘憺たり	離亭の晩
玉簫吹起滿眼愁	玉簫吹き起こす	滿眼の愁
長江之水自天流	長江の水	天より流る
英雄劍下傷心地	英雄劍下	傷心の地
悲士歌邊感慨淚	悲士歌辺	感慨の涙
秋風明月蟠人鬢	秋風明月	人の鬢を蟠うす

嗚呼人世莫作讀書子 嗚呼 人世讀書子と作る莫かれ  
と詠じられているが、「先輩には不興を蒙り故郷には面白からぬ評あり」という一文を認めた時、その出来事が胸中に蟠っていた逍遙は自らをシラーに擬することによって改めて過去を断ち切ろうとしたのではないか、と思うのである。

一方、ショーペンハウアー（二七八八—一八六〇）について言えば、シラーの場合のように逍遙がその著作を愛読しているのを伝える友人達の証言もなく、逍遙自身この哲学者の名を具体的に明示しているわけではないのだが、大学卒業後の明治二十七年八月九州に旅した時の感懷を記した「九州漫筆並びに序」（『逍遙遺稿』正編）に次のような箇所があるのは注目されよう。

……竟之缺陷世界、事事無不平、場場無不銷魂。潘郎之朱顔、宋子之文心、徒增感招慨而已。則浩浩古今、茫茫宇宙、寧不如木石之默默無識耳。嗚呼佛氏已說之、西哲亦演之。而多血青衿、尙不能解恨于彈鋏之間。淋漓關山、匹馬長鳴。文章經國、禿筆山積。乃畫策未就、空向鳳闕而致志。露華三更、鐵笛一曲、情塞難逾、愛關遮斷。欲見而不可見、欲逢而不可逢。錦絃全絕、而鴛夢俄驚、血淚共揮、而神骨凋瘵。吁是爲誰而然邪。

（之を竟むるに缺陷の世界は、事々不平ならざる無く、場々銷魂せざる無し。潘郎の朱顔、宋子の文心、徒に感を増し慨を招くのみ。則ち浩浩たる古今、茫々たる宇宙、寧ろ木石の黙々として識無きに如かざるのみ。嗚呼佛氏已に之を説き、西哲も亦た之を演ぜり。而して多血の青衿、尚ほ恨みを彈鋏の間に解く能はず。淋漓たる関山、匹馬長鳴す。文章經國、禿筆山積す。乃ち画策未だ就らず、空しく鳳闕に向つて志を致す。露華三更、

鉄笛一曲、情塞難越え難く、愛關遮断し、見えんと欲すれども見ゆ可からず、逢はんと欲すれども逢ふ可からず。錦絃全く絶え、而して鴛夢俄に驚き、血淚共に揮ひ、而して神骨凋瘵す。吁是れ誰の爲に然るや）。

〈缺陷世界〉は、ままたらぬこの世をいう。逍遙が愛読した澹澹外史こと明・馮夢龍の『情史』（『情史類略』卷十三・情憾類の評に「情史氏曰く、缺陷の世界は、憾む可きこと実に繁し」とある。ちなみに、明治十二年（一八七九）刊の嘲々醉士田中彝による抄録訓点本『情史抄』では「オモイドホリニユカヌヨノナカ」という左訓を施す。なお、下文の〈茫々宇宙〉の語は、例えば南宋・陸游の「晚秋の風雨」詩（『劍南詩稿』卷二十一）に「茫々たる宇宙の内、吾が道竟に何くに之かん」とあるが、実はこの語も『情史』卷九、情幻類の評に見えている。〈潘郎〉は、西晋・潘岳のこと。美男子で知られ、三十二歳で白髪を嘆じた。「秋興の賦」（『文選』卷十三）に「晋の十有四年、余春秋三十二、始めて二毛を見る」とあり、『情史』とともに逍遙の詩囊を肥やした清・陳球の『燕山外史』には「潘郎果を擲つこと多しと雖も、朱顔色を改む」という。〈宋子〉は、戦国・楚の文人、宋玉のこと。『楚辞』や『文選』に収められた「九弁」は悲秋の情を詠じた作品として名高い。江戸末期から明治にかけてよく読まれた明・高啓の「秋懷」十首其十（『高青丘集』卷三）には、潘岳と対偶表現にして「宋子悲しみ已に多く、潘生歎き強ひよ深し」と見える。〈文心〉は、文思、文章。〈青衿〉は、書生。『詩経』鄭風・子衿に「青青たる子が衿、悠悠たる我が心」とあるのに基づく語で、毛伝に「青衿は、青領なり。学子の服する所」と注する。〈彈鋏〉は、劍のつかを叩くこと。戦国・齊の公子孟嘗君の食客、馮諼（驪）が己れを遇することの薄いのを不満とし劍の鋏を弾いて「帰ら

んか、帰らんか」と歌った故事（『戦国策』齊策下、『史記』孟嘗君列伝）に拠る。〈淋漓〉、ここでは長く連なるさまをいうか。〈関山〉は、国境の山。その遙か遠い彼方に故郷がある。〈匹馬〉は、自分が乗った馬（実際に逍遙が乗っているわけではなく、あくまで詩的虚構である）。それが〈長鳴〉するのは、今は帰れぬ故郷を懐うが故であろう。〈文章経国〉は、魏・文帝（曹丕）『典論』論文（『文選』巻五十二）の「文章は経国の大業にして不朽の盛事なり」に拠る。〈鳳闕〉は、宮城。〈露華〉は、露の美称。〈三更〉は、真夜中。〈鉄笛〉は、鉄製の笛。〈情塞〉及び〈愛関〉は、恋路を阻むもの。〈錦絃〉は、華美な装飾を施した琴。逍遙が想いを寄せた南条貞子が爪弾く琴をいう。〈鴛夢〉は、深く愛し合う者同士が一緒に過す濃密な夢のような世界。鴛鴦夢ともいう。例えば、晩唐・曹唐の「漢武帝の李夫人を思ふ」詩に「白玉帳寒くして鴛夢絶え、紫陽宮遠くして雁書稀なり」とある。〈神骨〉は、心身。

ここで逍遙の云う〈西哲〉こそ、古代印度哲学とりわけ〈仏氏〉即ち仏陀の思想から影響を受け、盲目的意志に支配された人生は苦悩そのものであり、生の苦痛から逃れるためには欲望を否定しなければならぬと説いたショーペンハウアーのことなのである。無論、彼の哲学は灰色の厭世的色調に全てを塗り潰されるようなものではないとされるが、明治期に於いてはかかる見方が一般的であった。その思想から多大な影響を受けたのが、後年「僕に一個の主義一個の見地ありとせば、能く之有るを得たるは氏の哲學の賜也」と述懐している田岡嶺雲で、明治二十七八年頃に書かれた彼の文章にはこの哲学者の名が頻出する。

なお、逍遙や嶺雲が文科大学で学び始めた明治二十四年頃には、ドイツから帰朝した井上哲次郎（当時三十八歳）が講義でショーペ

ンハウアーを取り上げていたというから、授業に出席していたとすれば、その名前自体は早くに知っていたと思われるが、確証はない。その哲学に深く触れるようになったのは、もしかすると明治二十六年（一八九三）六月に來日し文科大学の教壇に立ったケーベル博士のドイツ訛りの強い英語による講義を通してではなかったかと思うものの、これもやはり臆測の域を出ないでいる。さらに言えば明治二十六年十二月から翌二十七年二月にかけて「早稲田文学」の第五十三、四、六、七、八号に掲載された〈みすゞのや〉こと金子筑水（二八七〇〜一九三七）「ショオペンハウエル」もあるいは影響するところがあつたのかも知れない。

以上、文科大学で漢学を修めた中野逍遙が、その一方で西欧の思想や文学にも眼を向け、シラーやショーペンハウアーを精神的糧として愛読していたことを友人の証言や彼自身の詩にもとづきながら検証しようとしたものである。なお、橋本夏男の「中野君志想ノ一斑」には先に引用した箇所の前に「其友ニ與ル書ニ世の人に向てわか思ふ如き熱情を望むことゆめ／＼かたかるへくむしる超然主義冷然主義に身を置いて動物の如き世人の眼をさまさんこと詩人の職分ならんかとわれは思ふト見ルヘシ君ハ文學ヲ以テ世ヲ濟ハントセシヲ君ノ志望豈尋常一様ノ者ナランヤ」という一節があり、これは嶺雲の「多憾の詩人故中野逍遙」にも引かれているのだが、橋本の引用する友人宛ての書簡に示された崇高な理想に燃える熱情を抱きながらも汶々たる俗世を憤るが故に却って冷腸を有せざるを得ないとする逍遙の心情を推し量る時、熱情の高揚をシラーによって鼓舞され、冷然主義の徹底をショーペンハウアーから学んだとみなすのは、あまりに短絡的で牽強附会に過ぎるであろうか。

## ○張滋昉のいつ

中野逍遙が明治二十七年一月作の「豆州漫筆」（『逍遙遺稿』正編）のなかで、篁村島田重礼（一八三八～一八九八）とともに「篁村先生世に在らば、未だ必ずしも望を学海に絶たず。慈君髯未だ霜を交へず、尚ほ他日の春風に及ぶ可し」といい、「吾が文を問ふ者は其れ唯だ篁邨先生か、吾が心を知る者は其れ唯だ慈君か」として深い信頼を寄せ、その歿後『逍遙遺稿』に序文を書いた張滋昉の経歴については、蒼海と号した副島種臣（一八二八～一九〇五）と親交があり、文科大学で支那語講師を務めた清国人であるという以外に、その生卒年を初めこれまでほとんど分からずにいたが、このたび復刻版『興亜会報告・亜細亜協会報告』第一巻（不二出版、一九九三年）に載せられた鱗澤彰夫氏の解説「興亜会の中国語教育」の末尾に「（興亜会支那語学校）中国人教師・張滋昉については略歴すら人名辞典の類に見られない」として、中国語教育の方面を主にその経歴が示されているのを知ったので、次に掲げておく。

張滋昉は道光己亥（十九）年十一月、順天府大興県に生まれ、国子監南学に学ぶ。明治九年副島種臣と交際を結び、また、曾根俊虎の中国滞在（明治九年二月～十一年一月）中に北京官話を教授する。明治十二年春、来日し長崎に滞在。十三年春、東京に到り、曾根俊虎宅に寄寓。二月、興亜会支那語学校教師に就任、一時期（十三年九月～十一月）、慶応義塾支那語科講師も勤め、十五年五月十四日興亜会支那語学校閉校にともない、同月十六日、文部省東京外国語学校漢語学講師に転ず。十九年同校廃校により退任。二十二年より二十七年迄帝国大学文科大学漢

語学講師、二十三年文部省東京高等商業学校嘱託支那語学講師を歴任する。初代琳琅閣主人の回想によれば、日清戦争後帰国したという。著書に明治二十八年大日本実業学会刊『支那語』（大日本実業学会普通商科講義録第五十五冊）張滋昉・林久昌共著があり、校閲したものに、明治十八年七月昇栄堂刊『英清会話独案内』田中正程訳、明治十八～二十一年大成館刊『明治字典』重野安繹総閲、北京音韻部榮太郎・張滋昉校閲、明治二十八年嵩山堂刊『日清字音鑑』・伊沢修二、大矢透著がある。張滋昉は、日清戦争以前の十五年間余りの長きにわたり、日本の中国語教育を支えた中国人中国語教師であった。

道光十九年は西暦で言えば一八三九年、清朝の威信を大きく揺るがしたばかりか、我が国に於いても識者の対外的危機意識を高める契機となった阿片戦争が勃発したのはその翌年にあたる。ちなみに、初代駐日公使を務めた何如璋（字は子峨、一八三八～一八九二）は道光十八年に、第二代の駐日公使で彼の地では散逸し我が国に残存する典籍を蒐集し『古逸叢書』を刊行した黎庶昌（字は莚齋、一八三七～一八九八）は道光十七年に生まれており、黎公使の随員には『日本訪書志』の著で知られ書家としても有名な楊守敬（字は惺吾、一八三九～一九一五）も含まれているが、彼は張滋昉と同甲であった。また『日本雜事詩』や『日本国志』の著がある黄遵憲（字は公度、一八四八～一九〇五）が生まれるのは九年後の道光二十八年である。さらに黎庶昌とともに「曾門の四弟子」、即ち曾國藩（諡は文正公、一八一七～一八七二）門下の四天王の一人に数えられ桐城派の掉尾を飾る吳汝倫（字は摯虞、一八四〇～一九〇三）は翌々年に生まれている。なお、この人は教育制度視察のため明治三十五年（一九〇二）に来日したことがある。張滋昉が生まれたのは、わが国では天保十年に



あたり、慶応三年（一八六七）生まれの中野逍遙からすれば一世代も上の人である。これまで逍遙とはせいぜい十歳か十五歳ほどしか年が違わないのではと想像していたので、少し意外に思われるが、二人の間に忘形の交が存在したのであろう。

張滋昉が来日するに至ったのは、もとより曾根俊虎（一八四七～一九一〇）——米沢の人。戊辰戦争の際、越後で陣没した儒者曾根俊臣の子で、雲井龍雄（一八四四～一八七〇）に兄事した。新政府に出仕して海軍に入り、明治十二年（一八七九）七月海軍大尉となる。明治六年三月、外務卿副島全權大使に随行して清国に渡って以来再三彼の地を訪れ、情報収集に当たっていた。<sup>（注1）</sup>——の徳憑にもよるだろうけれども、副島種臣との出会いに左右されるところが大きかったように思われる。副島種臣は、いわゆる明治六年の政変で西郷隆盛（一八二七～一八七七）や江藤新平（一八三四～一八七四）らと連袂して参議の職を辞し野に下った後、御用滞在という名目で東京に留められていたが、明治九年四十九歳の秋、その禁足が解けるや直ちに中国に旅立<sup>（注2）</sup>った。あしかけ三年にわたる漫遊を終えて帰国したのは十一年秋のことである。張滋昉と知り合った具体的な経緯については明らかでないものの、ある程度は彼の詠じた詩によって窺える。副島種臣の詩文集は明治三十八年（一九〇五）その歿後まもなく清人の短評を附した作を中心にまとめられた『蒼海遺稿』が出版されたのを始め、大正六年（一九一七）に『蒼海先生全集』が、昭和十二年（一九三七）に詩体別に編集された石田東陵編『蒼海詩選』がそれぞれ刊行されているのだが、このうち『全集』巻四および『詩選』巻五に、明治二十三年（一八九〇）の作と思われる「張先生の韻に次す」と題する七律があり、両人の邂逅を回想して次の如く詠じられている。

初相見地是荊州	初めて相見ゆる地は是れ荊州
七澤雲夢吞吐遊	七沢雲夢 吞吐の遊
樹色漢陽聊獻賦	樹色の漢陽 聊か賦を獻じ
月明滬瀆共觥籌	月明の滬瀆 共に籌を觥す
驚聞故國滄桑變	驚きて聞く故国滄桑の変
愁立灘頭紅蓼洲	愁ひて立つ灘頭紅蓼の洲
我返公臻誰用怪	我返り公臻る 誰か用って怪しまん
關東巨嶽入高樓	関東の巨岳 高樓に入る

この詩によれば、張滋昉に初めて遇ったのは、かつて〈雲夢沢〉などの七つの沼沢が存在した古の〈荊州〉（今の湖北省江陵県）の地に於いてのことになる。〈七沢〉〈雲夢〉は、司馬相如の「子虚の賦」（『文選』巻七）に「臣聞く楚に七沢有りと。（中略）臣の見る所、蓋し特に其の小小なる者のみ。名づけて雲夢と曰ふ」云々と見え、「雲夢の若き者を吞むこと八九、其の胸中に於いて曾て蒂芥せず」とある。第二句はこれを踏まえるのであろう。ちなみに『全集』では先に挙げた「張先生の韻に次す」詩の次に配列されている「張先生とともに飲む」詩に於いても、やはり荊州での出会いに触れ、「話は荊州に相見ゆる日、如今公も亦た飄蓬を嘆ず」と詠じられている。もっとも、二十年頃の作と思われる「張君子に寄す」詩（『全集』巻三）には、「昔我れ子を知る時、風霜吳江の濤」といい、上海で知り合ったと回想していて、些か混乱させられるのだが、二十六年正月の作「罵詈訕」の序（『全集』巻四）には「新年客稀にして、人暇豫を患ふ。張先生なる者、突如として其れ来たり。初め猶ほ慙慙、互いに旧故を話す。其の相識るは、蓋し荊州に在り。先生日本に來りて自り、既に十四五年。則ち余の漢上に翱翔するは、其の久しきこと知る可し」とあり、やはり荊州のこととして述べている。

〈突如其来如〉は、『易』離卦に見える表現。確たる資料に乏しいものの、兩人が初めて対面したのは湖北の地に於いてであつて上海で親交が深まったと見るのが妥当なところではあるまいか。その当否はともあれ、『張先生の韻に次ず』詩に戻ると、『漢陽』（今の湖北省武漢市）さらには『滬濱』（黃浦江の下流の地。上海を指す）と、互いに詩を獻酬し合い酒席を共にして交際を続けるうち、『故国滄桑の變』すなわち明治十年二月に勃発した西南戦争のニュースを（灘頭）で聞いた。それから八カ月後、九月二十四日の西郷自尽の報を耳にしたのであろう、深い悲しみに襲われ無限の憂愁を抱いて、なすすべもなく海の彼方に眼をやったまま茫然と立ち竦んでいる己が姿を詠じている。〈紅蓼〉は、赤ままの花。江南の秋を彩る風物として晩唐あたりから詩に見える。この一年後に彼が帰国すると、ついで翌春、張滋昉が来日した。時に明治十二年、この清国人はすでに不惑の歳を越えていた。第七句に〈誰か用つて怪しまん〉とあるのは、この言葉の背後にある具体的な事情は不明ながら、帰国した副島種臣の後を追うようにして張滋昉が海を渡って来たことについて、わが国の内情を偵察しに来たとか何かこの当時取沙汰するような動きがあつたのを封じたものであろう。結句の〈関東巨岳〉とは富士山のことである。

ところで、明治十三年四月一日刊の「興亜会報告 第二集」には、『欽差大臣何公使ト曾根氏ノ談話』と題する記事が載せられており、それには、新聞で興亜会創立とともに語学校設立の話を知った何如璋が教師として招かれた張滋昉について「果シテ何省何縣ノ人ニ係ルヤ貴地ニ至ルハ果シテ何ノ縁ニ由ルヤ」と尋ねたのに対して、曾根俊虎が「張滋昉ハ北京南城ノ儒士ニシテ前年副島種臣氏ガ貴國ニ遊バレシ時訂交セラレタル人ニテ又弟前年貴國ニ在リシ時官話ヲ傳

習セシ人ナリ從來張氏ハ弊國ニ遊歴ノ念アリ既ニ昨春上海ヨリ崎港ニ至リシガ該地ノ詩士文人等ニ請ハレ滞在スルヲ十閱月今春初テ副島ト弟トヲ尋テ到京シ暫時弊居ニ寓セリ」云々と答えた話が見えるのだが、何如璋が張滋昉の身の上についてわざわざ尋ねているのは、従来官途に就いた経歴がないためであらう。彼の地に於いて殆ど無名に等しい人物だとしても過言ではないようだ。そのため副島種臣と出会う以前の張滋昉については、これを知る手だてに缺ける。

但し、明治二十五年作の「張公を招きて飲む。雨山も亦た至り、佐々木子陪す。盃を引きて高歌すれば、則ち臘月の群陰悉く祛ふを覚ゆ。夫れ丈夫志を得ざれば則ち已む。若し志を得んか、天下を治めること諸を掌に運ぶ可し。是れ騷人の義なり。悲しいかな」（『全集』巻四、『詩選』巻五）と題する七律に、

張公高節駕高舟	張公節を高くして高舟に駕し
日事吟哦泛浮	日び吟哦を事とし泛泛として浮かぶ
即自燕臺徂楚地	即ち燕台（よ）より楚地に徂（ゆ）ぎ
便經上海達滄州	便ち上海を経て滄州に達す
常陽池館哭朱子	常陽の池館に朱子を哭し
江戸泮林談孔丘	江戸の泮林に孔丘を談ず
歲暮草廬相對飲	歲暮 草廬に相對して飲む
亭阜落木不關愁	亭阜（ていふ）の落木 愁に關せず

※『遺稿』および『全集』は、池を舎に作る。

と詠じられており、前半四句から来日前の行跡の一端が僅かながら窺える。詩題に見える佐々木子は、蒼海の書生佐々木哲太郎（一八六六―一九二六）のことで、当時二十七歳。雨山は、歿後二十余年を経て刊行された名著『中國書畫話』（筑摩叢書、一九六五年）で知られる長尾甲（通称は楳太郎、一八六四―一九四二）の号で、当時二十

九歳。後に一時期、五高教授を務め、その際、同僚の夏目漱石が漢詩の添削を乞うたことがある。ついでに言えば、「張公を招きて飲む」とはいうものの、主人の蒼海自身は「平生酒中の趣を解せず」(『全集』巻一、「解嘲」四首其一)というように飲める人ではなかったが、招かれた張滋昉の方は随分といける口で、雨山も好きな方であった。詩中の〈高節〉は、官職に就いていないことを暗示する常套表現で、〈燕台〉は、戦国時代、燕の昭王が築いた黄金台にちなみ北京を指す。〈楚地に徂く〉とあるから、張滋昉は北京から湖北・湖南にかけて遊歴していたことになる。そして先に挙げた「張先生の韻に次す」詩に述べられている内容と考え合わせれば、湖北の地で副島種臣と知り合い、それからずっと行動を共にしたかどうかは判然とせぬものの、とにかく上海に出てさらに親交を深め、やがて来日するに至ったということであろう。なお〈滄州〉は、わが国をかく称する。詩の後半は東京にやって来てからのことが詠じられており、今ここで問題としている内容と直接関係しないものの、とりあえず語釈をつけておくと、〈常陽〉は、常陸を中国風にいい、〈朱子〉は、明朝滅亡後わが国に亡命し、水戸光圀の賓師となった朱舜水(一六〇〇〜一六八二)のこと。常陸太田市に墓がある。〈泮林〉は、湯島の聖堂。『詩経』魯頌・泮水に「翩たる彼の飛鳴、泮林に集まる」とあり、諸侯の国学を泮宮(ひやうくう)というのに拠る。〈亭臯〉は、沢地にある亭。例えば六朝・梁の柳惔(りゅうとう)「搗衣の詩」に「亭臯に木葉下り、隴首に秋雲飛ぶ」と見える。宋玉が「悲しい哉秋の氣為るや、蕭瑟として草木揺落して変衰す」と詠じて以来、詩文において秋は悲しい季節とされるのに対し、種臣は友と酒を酌み交わせば愁いなど与り知らぬことだといふので、〈愁に閑せず〉と結ぶ。とはいえ、そこにさえって(愁い)が胸底深く秘められていることを暗に示しているよう。

ちなみに、この詩について張滋昉は「小序は高掌遠蹠、朗懷畢く現はる。詩は則ち遙情逸韻、嘯傲滄洲を凌ぐ。鄙人何ぞ修めて此を得ん」(『遺稿』)と評している。〈高掌遠蹠〉は、後漢・張衡「西京の賦」(『文選』巻二)に見える語だが、ここでは遠大な志、壯図をいう。

さて明治十三年春、東京にやって来た張滋昉が曽根俊虎の家に旅装を解いて間もない二月十四日には、彼のもとへ大河内輝声(号は桂閣、当時三十三歳)と石川鴻斎(名は英、四十八歳)の二人が訪ねている。曽根俊虎の周旋によって、その前日興亜会が発足したが、彼も早速入会し、それと同時に興亜会が芝区西ノ久保の榮寿寺内に開設した支那語学校で教え始めた。七月十四日には、清国公使館員の黄遵憲とともに修史館一等編集官川田甕江(剛、五十歳)の家に招かれた。その席に列した依田学海(百川、四十八歳)は『学海日録』第四卷(岩波書店、一九九二年)に、

かねて川田編修が家に、清国公使館の書記官黄遵憲<sup>字公、号度</sup>、また文部に語学の教師として招かれたる張景<sup>号滋</sup>の両士を招かる、よしにて、余及び三島中洲・四屋穂峯・小永井小舟・岩谷注堂・日下部翠雨などを会せられて筆話す。黄は三十余の人なり。張は四十ほどなるべし。公度、才氣すぐれたるよし聞ゆ。

と記して、次に黄遵憲との筆談の内容を挙げ、ついで張滋昉とのそれを示しているのだが、さすがに黄遵憲と並ぶと張滋昉の方は些か影が薄かったようで、学海の興味や関心は専ら黄遵憲に注がれている。なお、張滋昉が「文部に語学の教師として招かれ」たというのは、学海の勘違いであろう。ちなみに、ここに名前の挙がっている三島中洲(毅、五十一歳)は二松学舎の創設者で、帝国大学にも出講していた。四屋穂峯は修史館にいた四谷恒之(五十歳)、小永井小

舟は浅草に漢学塾を開いていた小永井岳（五十二歳）、岩谷迂堂は巖谷小波の父一六（修、四十七歳）、日下部翠雨は日下部鳴鶴（東作、四十三歳）のこと。一六、鳴鶴ともに書家して名高い。

さらに『学海日録』には、それから一ヶ月余り後の八月廿三日の条に「川田・小永井・北沢の数子」と柳洲（柳島）の料亭「はし本」で一杯やっていたとき隣の楼に來合せていた張滋昉がその席にやつてきて筆談に及んだことを述べ、「景弢詩二首ありしかど、拙ければしるしとゞめず」と記している。<sup>(註21)</sup> 北沢は北沢乾堂（正誠）のことである。

また十三年のことかどうかは断定できないが、股野藍田（琢、四十三歳）から求められて、その同年作の「庚辰十一月一日、茗簫の旧友と同一に重ねて八百松楼に飲む」詩に評語を加えている。

十一月十八日には興亜会の親睦会が麹町の米花堂で開かれ、席上、張滋昉は次のような口占の詩を作った。

氣清風朗淨氛埃 氣清く風朗らかにして氛埃<sup>きや</sup>淨く

雅集賓朋盛會開 雅集の賓朋 盛會<sup>いさめ</sup>開く

慷慨共懷憂國志 慷慨<sup>いさめ</sup>共に憂國の志を懷く

艱危須賴濟時才 艱危<sup>いさめ</sup>須らく濟時の才に賴るべし

青天鴻鵠忽鷗舉 青天の鴻鵠 鷗<sup>う</sup>を忽<sup>いさめ</sup>せにして挙り

碧海鯨鯢掣浪廻 碧海の鯨鯢 浪を掣<sup>ひ</sup>して廻る

固圉已聯縞紵誼 固圉<sup>こい</sup>已に聯<sup>つら</sup>ぬ縞紵<sup>こうしよ</sup>の誼

同仇還望絶嫌猜 同仇還た望む嫌猜を絶たんことを

青海原をわがもの顔に泳ぎ回る《鯨鯢》は、欧米列強の譬え。これに對して突風を物とせせず青天高く舞い上がる《鴻鵠》は日清提携の姿を象徴しているのであろう。《固圉》は、国境の守りを堅固にすること。『左伝』隱公十一年に「亦た聊<sup>いさめ</sup>か以て吾が圉を固くせん」と

あり、杜預の注に「圉は、辺垂なり」という。《縞紵》は、呉の季札が鄭の子産に呉地で貴ばれている縞（白絹）で作った帯を与え、子産が鄭国で貴ばれている紵（麻布）の衣を献じた故事から、友人間の真心のこもった贈り物を指す。友好のしるし。『左伝』襄公二十九年に見える。《同仇》の語は、『詩經』秦風・無衣に「我が戈矛を修め、子と仇を同じうす」とあるのに基づく。ここで張滋昉は、欧米列強に對抗するには、日清両国の友好提携が不可欠であるとして、ために信頼関係を損ねるような嫌疑を忌避すべきだと説いているのである。その背景には、おそらく前年の琉球帰属問題が関係しているよう。この詩は、十一月二十二日の「東京日日新聞」に興亜会の親睦会の模様を報ずる記事でも紹介され、十二月十五日刊の「興亜会報告」第十三集文苑雜報欄にも載せられた。

ついで明治十四年六月三十日の「興亜会報告」第十七集の文苑雜報欄には、第三代会長の副島種臣が支那語学校を視察し、張滋昉と唱和した作が載せられている。このように、張滋昉は北京官話を教えるばかりでなく、興亜会の「興亜会報告」及び明治十六年一月に会名が亜細亜協会と変更されて後の機関誌「亜細亜協会報告」の文苑欄に於いて、そこに寄せられた同人の詩文に評語を加えたり、自身の作を掲載したりしていたが、しだいに興亜会や協会関係者を中心に当時の名士や漢詩人たちと間にも交流が広がり、やがて漢詩の専門雜誌にもその名を見ることができるようになる。

明治十六年（一八八三）四月十九日刊の「亜細亜協会報告」第三編の文苑雜報欄には「長岡雲海先生に招かる。諸君と同じく雅集の席上賦して呈す」と題する詩が見える。<sup>(註22)</sup> 雲海と号した長岡護美（一八四二—一九〇六）は元熊本藩主細川斉護の六男で興亜会の初代会長を務め、この当時は元老院議員であった。その漢詩集に明治三十六

年刊の『雲海詩抄』上下二巻があり、『雲海詩抄続編』上下二巻とともに後に大正三年刊『長岡雲海公伝』の附録巻四、五に収められている。

同年十月十六日刊の「亜細亜協会報告」第九篇の文苑餘賞欄には、會員の仁礼敬之が上海に遊学する際に贈った「仁礼雅兄、我が邦に留学す。行に瀕して詩を索む。率に賦して別れに誌す」と題する七絶二首が載せられた。其二には次のように詠じられている。

扶桑我已久勾留 扶桑 我已に久しく勾留せらる

秋月春風記共遊 秋月春風 共に遊びしを記す

知己相逢如問訊 知己相逢ひて如し問訊せば

頭銜依舊醉鄉侯 頭銜旧に依つて醉郷侯

※原文は候に作るが、誤植であろう。

後半二句は、盛唐・王昌齡の「芙蓉楼にて辛漸を送る」詩に「洛陽の親友如し相問はば、一片の冰心玉壺に在り」というのを踏まえ、彼の地で私のことを尋ねられたら、相も変わらず肩書のない無位無官の身ながら、「醉郷記」を書いた初唐の王績や「酔ひに真郷有らば我れ侯たる可し」と詠じた北宋の蘇東坡よろしく我輩は酔いどれ天国を領する大名だと伝えてくれという意。諧謔味を帯びた口調のなかにも、事志と違うというか、一抹の不如意感が漂っているように感じられよう。

もつともその実、先に挙げた口占の詩に見るが如く、張滋昉は胸に「憂国の志」を抱く硬骨漢でもあった。明治十七年（一八六四）六月、清仏戦争が起こり、八月にフランス艦隊が福州を砲撃したという報せを聞くや、母国の危機に敏感に反応した。そのことは、副島種臣に「張滋昉の聞驚を聞きて感有りに和す」詩（『全集』巻三）があることから知られる。張の原詩はどういうものかわからぬが、種

臣の詩は次の如くである。

閩疆烽火使人驚 閩疆の烽火 人をして驚かしむ

故國艱難易感情 故國の艱難 情に感じ易し

北地新涼先問雁 北地の新涼 先づ雁を問ひ

南方殘瘴急行兵 南方の殘瘴 急に兵を行ふ

何時可喜凱歌入 何れの時にか喜ぶ可し凱歌の入るを

刻日方聞寇闖平 刻日方に聞かん寇闖平らぐを

座上來賓漢中士 座上の來賓 漢中の士

撫刀鞘裡有龍鳴 刀を撫せば鞘裡龍鳴有り

〈閩疆〉は、福建省の沿岸部。〈殘瘴〉は、有害な湿熱の気がまだ消えずいること。〈刻日〉は、日を期して。〈漢中士〉は、中国の人士の意で、張滋昉を指す。〈龍鳴〉は、劍の唸り。名劍は龍の化身とされたことによるもので、雄心勃勃たるをいう。例えば、李白「独漉篇」に「雄劍壁に挂くれば時時龍鳴す」とある。

ついにながら、書家の小林梧竹（一八二七—一九一三）に詩を贈ったのも、この明治十七年のことであつたらしい。梧竹は、佐賀鍋島の支藩小城の出身で種臣より一歳年上、明治十五年に清国に遊び主に北京に滞在して十七年四月に帰国した。彼の地で蒐集した碑帖を携えて七月東京に出、種臣の紹介で銀座伊勢幸の二階に寄寓していたのである。

明治十九年（一八八六）二月二十四日の「朝野新聞」雑報欄と同年二十八日刊「亜細亜協会報告」第二篇の文苑餘賞欄とに、「末広鉄腸の病より起くの原韻に和す」詩が載せられた。

依然彩筆又生花 依然として彩筆又た花を生じ

海鶴風姿煥紫霞 海鶴の風姿 紫霞に煥たり

行樂及時身更健 行樂時に及んで身更に健にして

攝生有術壽頻加

攝生術有り寿頻りに加ふ

驚人妙句傳千古

人を驚かす妙句 千古に伝はり

濟世名言自一家

世を濟ふ名言 一家自りす

從此病魔消除盡

此れ從り病魔消除し尽くす

漫將杯影誤弓蛇

漫に杯影を將て弓蛇に誤る

鉄腸と号した末広重恭（二八四九〜一八九六）は伊予宇和島の人で、

若い頃八幡浜で上甲振洋（一八一七〜一八七八）に師事し、続いて京都の陽明学者春日潜庵（一八一〜一八七八）の門に学んだ。中野逍遙にとつては同郷の先輩にあたる。藩校明倫館の教授を務めた後、

県の少属となったが上司と合わずして上京、一時大蔵省に出仕したものの意を得ず、遂に操觚界に身を投じ、この当時は成島柳北（一八三七〜一八八四）の「朝野新聞」にあつた。そして柳北ともども興亜会会員に名を列ねていたのである。洛陽の紙価を高めた「二十三年未來記」や『雪中梅』などの政治小説はいずれもこの明治十九年に博文堂から刊行された。ちなみに、鉄腸の原作「病より起く」詩は二月四日の「朝野新聞」雑報欄の「鐵腸再生ス」に見え、大正七年（一九一八）二月に刊行の『鉄腸遺稿』上下二冊のうち上冊巻一に収録されている。〈彩筆〉は、五色の筆。豊かな文才をいう。六朝・梁の江淹が夢の中で五色の筆を授けられて大いに文思が進み

（『南史』江淹伝）、また盛唐の李白は筆先に花が生ずる夢を見てから才能が開花したという（『開元天寶遺事』）。〈海鶴〉の語は、例えば、中唐・李郢の「裴晋公に上る」詩に「四朝国を憂ひ鬢糸と成る、龍馬の精神海鶴の姿」と見える。〈一家〉は、一家言。結句は、西晋・樂広の友人が杯に映った影を、本当は壁にかけてある弓が映っただけなのに蛇の姿だと錯覚しその酒を飲んで病気になった故事（『晋書』樂広伝）を踏まえ、神経が疲れているため過敏になつて大病だ

と思ひ込んだのに過ぎないから大丈夫だと元気づけているのである。さらに、二十一年四月六日の「朝野新聞」雑報欄には、張滋昉の「戊子仲春、末広鉄腸先生の將に欧州に游ばんとするを聞き詩を賦す」と題する作が見え、同欄には森槐南（一八六三〜一九一）の「末広君鉄腸の海外に周游するを送る」詩も掲載された。なお、『鉄腸遺稿』には、明治二十五年末から二十六年初めにかけての作に張滋昉の評語が附されている。

明治二十二年（一八八九）十月三日、二度目の駐日公使として一昨年より赴任中の黎庶昌が芝公園の紅葉館で都下の漢詩人数十人を招いて重陽の讌集を催した際、張滋昉もこれに出席した。その盛会ぶりを記録した孫點（君異）編『己丑讌集續編』巻下「登高集」に収められた「己丑重九讌集會者姓氏録」に「張滋昉、字袖海。順天大興人。原籍廣東瓊州」と見え、同書所収の西島醇「紅葉館讌集記」にいう「清客張君」とは、張滋昉のことである。「登高集」には、その「己丑重九星使黎公、日東の諸名流を紅葉館に宴す。命ぜられて末座に陪す。率に四詩を賦し、録して教正に呈す」と題する詩が載せられ、其四に次のように詠じられている。

落木蕭蕭天地秋

落木蕭蕭 天地の秋

龍沙高會此登樓

龍沙の高會 此に樓に登る

凌雲縹渺三山景

雲を凌ぐ縹渺三山の景

濯足蒼茫萬里流

足を濯ぶ蒼茫万里の流れ

瀛島追陪北海宴

瀛島追つて陪す北海の宴

瞿塘久滯杜陵舟

瞿塘久しく滯る杜陵の舟

十年浪迹休相問

十年の浪迹 相問ふを休めよ

我本江湖一寄鷗

我は本と江湖の一寄鷗

起句は、杜甫「登高」詩の「無辺の落木は蕭蕭として下る」に基づ

く。《龍沙》は、江西省新建県の北に在る砂州の名で、中唐・權德輿に「李大夫の九日龍沙の宴会に陪し奉る」詩がある。《凌雲》は、楼の高きをいう。《三山》は、東海中にある神仙の住む三つの山。白居易「長恨歌」には「海上の仙山」の「虚無縹緲の間に在る」ことを詠する。ここでは我が国を指す。下文の《瀛島》は、瀛洲のこと、この三山の一つ。《北海》は、北海太守であった魏・孔融。黎庶昌を擬えていう。《瞿塘》は、巫峡・西陵峡とともに三峡の一。四川省奉節県の東にある舟の難所。《杜陵》は、杜甫のこと。京兆杜陵の人であるから、かく称す。この句は、張滋昉が自らについて、わが国に滞留していることをいう。《浪迹》は、行方定めず気ままにさすらうこと。梁・江淹の「雜体詩」三十首其十八（『文選』卷三十一）に「迹を浪にして蚩妍無く、然して後に君子の道なり」とある。結びの句は、李白「廬山謠、盧侍御虛舟に寄す」の「我は本と楚の狂人、鳳歌孔丘を笑ふ」及び杜甫「秋夜旅懷」詩の「飄飄何の似る所ぞ、天地一沙鷗」を踏まえた表現。《江湖》は、湖や大川のほとり。束縛の多い官僚社会とは無縁な自由の天地をいう。この己丑重陽の讌集については、神田喜一郎博士の『日本における中国文学Ⅱ』（『神田喜一郎全集Ⅶ』所収、同朋舎出版、一九八六年）の「六十二 己丑重九讌集と槐南・君異の笛家（一）」及び三浦叶氏の『明治漢文學史』（汲古書院、一九九八年）にも言及されている。

ところで、神田博士の前掲書「七十一 竹礫の大患と病後の作品（一）」には、張滋昉について次のように紹介されている。

……張袖海、名は滋昉、順天大興の人、原籍は廣東瓊州とある。當時日本に在つて清語の教授をしてゐた。詩文の才があり、副島蒼海のところへ常に出入し、蒼海に彼と唱酬した詩が尠くない。

竹礫は、森川健蔵（一八六九～一九一七）の号。この明治二年生まれの年若い漢詩人は、わが国有数の填詞作家でもあり、漢詩の専門誌「鷗夢新誌」を主宰した。その大患というのは明治二十三年（一八九〇）夏のこと、その回復後に作られた「病起懷人詩」（『鷗夢新誌』第五十三集、後に『得聞集』巻上に収む）には、張袖海滋昉について、

淹留蓬島幾經年　蓬島に淹留して幾たびか年を経る  
老矣劉郎也可憐　老いたり劉郎也た憐れむ可し  
博得酒人聲價在　博し得て酒人の声価在り  
醉餘笑罵舌搖然　醉餘の笑罵　舌搖然

と詠じている。《蓬島》は、先に見えた神仙の住む山の一つ、蓬萊のこと。わが国を指す。《劉郎》は、六朝・劉義慶『幽明錄』に見える劉晨のこと。阮肇とともに天台山に藥草採りに行つて道に迷い、仙女に遇つて半年を過ごしたが、帰つてみれば既に七世を経ていたという。張滋昉を擬える。《搖然》は、舌があがつて声の出ぬこと。ろれつのまわらぬのをいう。『史記』扁鵲倉公列伝に「舌搖然として下らず」とある。ちなみに、明治二十四年四月に上梓された竹礫の『得聞集』に張滋昉は序を書いているのだが、そこでは自らを（『浮查散人』と号している。《浮查》は、『論語』公治長篇の「子曰く、道行はれず、桴に乗りて海に浮かばん」とあるのに基づく語で、その自称から、中国では志を得ず、海を渡つて日本に來たものの、縦横に才能を発揮する場や機会もないままに無為無能の余計者となつていくとする彼の心情を汲み取つても、あながち不当ではあるまい。

明治二十四年（一八九二）一月、李鴻章（一八二三～一九〇二）の甥でその嗣子となつた李経方（一八五五～一九三四）が黎庶昌の後任の駐日公使として來日した。その書記官に選ばれて六月六日着任したのが、後に満洲国初代國務總理を務めた鄭孝胥（一八六〇～一九三

八)である。字は蘇堪(蘇戡、蘇龔)、福建省閩県(今の福州市)の出身で、光緒八年(一八八二)の挙人。「旧詩壇の驍將」と評され、『海藏樓詩』十卷続三巻がある。彼は二十三歳から七十九歳までの五十六年におよぶ間の日記を残しており、近年勞祖德氏の整理をへて『中国近代人物日記叢書』の『鄭孝胥日記』全五冊(中華書局、一九九三年)として刊行されたが、その東京駐在中の記述には張滋昉に關して興味ある内容が多々見られる。来日後二週間ほど経た六月二十一日(光緒十七年五月十五日)の条に、「教習張袖海来りて坐す。已に酔へり。琅然自ら詩十數篇を誦す。聴く可き者有り」と記し、

世事蒼狗の幻に任從せ、天機翻つて是れ白鷗閑なり

坐を罵るは因る有り酒を借るに非ず、点金術無く但だ空に書す  
道路流伝劍を按ずるに堪え、深山何処にか藏舟を覓めん

等の句例を書き留めている。(蒼狗)の語は、杜甫の「數ず可し」詩に「天上の浮雲は白衣に似たり、斯須改変して蒼狗の如し」とあるのを踏まえ、変化常ならざる喩え。(天機)は、天意。天の秘密。(点金は、道家の語で鉄を黄金に変えること。ここでは金儲けをいう。『書空』は、晋・殷浩の故事。敗軍の責めを負つて庶人の身分におとされ、日がな一日、空に向かつて「咄咄怪事」(ちえつ、けつたいな)という四字だけを書いていたという(『世說新語』黜免篇)。(道路)云々は、『史記』鄒陽伝の「明月の珠、夜光の璧、闇を以て人に道路に投ずる、人劍を按じて相眄みざる者無し。何となれば則ち因る無くして前に至ればなり」というのに抛り、(藏舟)は、『莊子』大宗師篇に「舟を壑に藏し、山を沢に藏し、之を固しと謂へり。然れども夜半力有る者之を負ひて走れば、昧者知らざるなり」とあるのに基づく語で、確固不拔の喩え。この二句は、つまらぬ噂がむやみに広がって思はず身構えもするが、その出所はわからずいっただいこ

に確かなものを求められよう、というような意味であろう。そして『日記』では、さらに語を継ぎ、「華人の在日する者、張を善と為せり」と記した後、

酒を嗜みて不羈、金を得れば輒ち揮霍して生事を理めず。詩は草を編まず。多く日本の従ひ学ぶ者の為に取り去らる。蓋し此に浪游すること十二年なりき。其の刻集を勸むる者有れば、答へて曰く、吾が詩未だ必ずしも世に伝へず、身と存亡するも可なり。という張滋昉の言葉を挙げている。(揮霍)は大盤振舞の意。

このように鄭孝胥が張滋昉についてかなり詳しく記しているのは、もとよりその話に興味を抱いたのは当然ながら、その人物にどこか惹かれるものがあつたからに違いない。その後、明治二十六年(一八九三)四月に駐神戸兼大阪領事として東京を離れるまで頻繁に彼の名が登場する。ともに酒を飲み料亭に遊んだりする一方で、政界の動向を報せ新聞界の内幕を教えるなど、鄭孝胥にとって滞日十二年に及び各界の事情に通じている張滋昉は、各方面で貴重な情報源でもあつたようだ。なお、日記の中に張滋昉について「旧家の子弟」とか「世家の子弟」などと形容している箇所が見え、副島種臣にも「清国の貴紳」と称した例があるが、その家世についても現在のところ具体的な事柄は不明である。ついでに記せば、鄭孝胥とは「終生の刎頸の交わりをむすぶ」ことになる長尾雨山をその年の十二月初めて彼に引き合わせたのも、この張滋昉であつた。

明治二十六年一月、「鷗夢新誌」第七十六集に「自ら小影に題す」という張滋昉の七絶が載せられた。

浪迹扶桑一寓公 迹を扶桑に浪にす一寓公  
酒間時吐氣如虹 酒間 時に吐く氣虹の如し  
盱衡世事殷憂切 世事を盱衡して殷憂切なり



却被人呼作醉翁 却って人に呼ばれて醉翁と作る

《寓公》の語は、『礼記』郊特性に「諸侯は寓公を臣とせず、故に古は寓公世を継がず」と見え、故郷喪失者として他国に流離する者の謂で、張滋昉自身をいう。《氣如虹》は、意氣盛んなこと。例えば、晩唐・皮日休の「令狐補闕の朝に帰るを送る」詩に「文は日月の如く氣は虹の如し」と見える。《盱衡》は、眉をつりあげ目をむくこと。結句は自嘲の語であるが、一首全体としては解嘲の作とみなせよう。ちなみに、この詩について竹磯は、「小影に題して胸中を言ふ、正に是れ外自り視る能はざる處、詩以て之を補ふなり。然れども二十八字、宛然として袖海先生を見る、亦た是れ其の小影なるのみ。呵呵」と評している。

明治二十七年（一八九四）八月一日、日本政府は清国に宣戦布告した。日清間の友好提携を念じていた張滋昉が、かねてより朝鮮をめぐる両国間の紛擾に心痛めていたであろうことは想像に難くないけれども、多くの清国人が引き揚げるなかにあつて、ひとり東京に留まった彼が如何なる思いで戦争の推移を見守っていたのか、それを物語る資料を残念ながら今のところ見い出せずにいる。当時、柳井綱齋（一八七二～一九〇五）編の『征清詩集』や野口寧齋（一八六七～一九〇五）編の『大轟餘光』が刊行されるなか、張滋昉はどのような感慨を抱いたのであろうか。また北洋艦隊司令長官丁汝昌（一八三六～一九一五）の死は新聞紙上に大々的に取り上げられたが、これらのことに対して、おそらくは酒に沈酔したまま堅く口を閉ざしていたのではあるまいか。

明治二十九年（一八九六）六十九歳の副島種臣が「九日、袖海を招きて飲む」二首（『全集』巻五、『詩選』巻五）を作った。其二には、張滋昉について次のように詠じられている。

江關爲客又重陽	江關に客と爲り 又た重陽
異域風塵慣旅裝	異域の風塵 旅装慣る
榆塞昨年龍戰野	榆塞 昨年 龍 野に戦ひ
草堂今日蟻浮觴	草堂 今日 蟻 觴に浮かぶ
氣干霜雪菊初萼	氣は霜雪を干して菊初めて萼たり
愁入雲陰鴻早翔	愁は雲陰に入りて鴻早くも翔ぶ
庚信此間最蕭瑟	庚信 此の間 最も蕭瑟
不妨桑落透人腸	桑落 人腸に透るを妨げず

《江關》は、ここでは江戸を中国風にいう。東京のこと。《榆塞》は、中国北辺の地。『漢書』韓安国伝に「石を累ねて城と爲し榆を樹ゑて塞と爲す」とあるのに基づく語。例えば、初唐・駱賓王の「鄭少府の遼に入るを送る」詩に「辺烽榆塞を警め、俠客桑乾を度る」とある。この場合、平壤あたりを指すのであろう。《龍戰野》の語は、『易』坤卦の「龍 野に戦ひ、其の血玄黄」に基づき、日清両軍の会戦をいう。《蟻》は、酒の表面に浮かぶ泡。《庚信》云々は、杜甫の「古跡を詠懐す」詩五首其一に「庚信は生平最も蕭瑟、暮年の詩賦は江関を動かす」とあるのによる。庚信は六朝の詩人。初め南朝の梁に仕え、元帝の命を受けて西魏に使いして長安に留まるうちに西魏が北周に滅ばされ、故国の梁も陳霸先に篡奪されたため、そのまま北周に仕えた。「江南を哀しむの賦」が名高い。わが国に流寓して久しい張滋昉を擬えたもの。《蕭瑟》は、疊韻の語で、ものさびしいさま。ちなみに、杜詩の江関は先のと違い、江南と関中の地。なお、種臣は明治二十三年作の「秋、懷を張袖海に寄す」詩（『全集』巻四、『詩選』巻五）でも「庚信の吟篇最も蕭瑟、十年反らず客愁濃し」と詠じている。《桑落》は、酒のこと。秋の末、桑の葉が落ちる頃に醸すという。

明治三十一年（一八九八）一月二十八日、「東京朝日新聞」に「蒼海老伯を訪ふ」という見出しで、張滋昉の困窮を憂え病後の身を案する副島種臣の談話が載った。千駄ヶ谷村本宿の邸に老伯を訪うた朝日の記者は「伯ハ梅花馥郁たる銅瓶の傍に幾多漢魏六朝の詩書を堆積せしめ、瘦軀鶴の如く儼然として坐せり」と、さながら超俗の高士のような風韻漂う蒼海について先ず叙した後、おもむろに口を開いた彼の談話を記しているだが、その中に次のような箇所がある。

……余の友人なる清人張滋昉氏ハ一兩年前より中風症に罹り已に東京帝國大學の雇をも解かれ、氏の事とて清貧洗ふが如く殆んど糊口の道にも差支ふる場合に陥れり。氏ハ我國に支那語の教授を掌めたる鼻祖にして多年斯文の擴張に従事し殆んど我國人の如し今日落魄の餘り歸國セバ思はぬ災難にかゝる事もあらん且氏も我邦を以て終焉の地としたしとの望なれば余ハ昨年大隈君が朝にありし時松方君と相談して同氏を救助し呉るゝ様懇請せしに大隈君も快よく承諾し呉れたるが未だ實行せざる内に野に退き遂に御流となりたり、故に余ハ近日伊藤君を訪ひ更に張氏救助の事を懇請する心算なり同氏の如きハ我國にハ随分盡したる人なれば之を救済するハ至當の事と考ふ云々

性来酒好きとはいえ胸中の塊壘を洗いがすべく長年にわたり大量に呷つたせいか、《酒人》やら《醉翁》やらの綽名と引き替えに贏ち得たのは中風という結果だった。時の首相や政府の要人に働きかけて何とか救済措置を講じたいとする副島種臣の配慮も空しく、翌三十二年（一八九九）七月、六十一歳の張滋昉は二十年にも及ぶ東京での生活に別れを告げ乍しく帰国することとなった。前年の秋に

は、戊戌の政変に敗れた康有為（一八五八―一九二七）や梁啓超（一八七三―一九二九）がわが国に亡命しているから、ちやうど入れ替わるように立ち去つたことになる。新聞や論壇では支那人雜居問題が取沙汰されていた頃である。

その離日については、神田博士が前掲書の「百十八 明治三十二年の填詞壇（二）」のなかで、

この七月、多年東京に流寓してゐた清客張袖海（滋昉）が「世外將爲世上人。多年蟻屈一朝伸。雖然未際風雲會。已覺胸中萬象春。」の七絶一首を遺して歸國した。森槐南はこの袖海の詩に評語を書いて、「轆轤不遇。毫不掛懷。闊達豪邁。決然而去。惜君只欲苦死留。富貴何如草頭露也。」と言つてゐるが、以て袖海の人物を推察することができよう。竹俣は親交の間柄でもあつたので

望雲間 送張袖海歸清國 前段集 陶彭澤歸去來辭中字。

歸去來兮。心在去留。言今歸去來兮。既心爲形役。惆悵而悲。實覺昨非今是。吾生已矣何之。引壺觴自酌。樂以消憂。

天命奚疑。人間富貴。世上風雲。莫言際會無機。樣泛蓬萊清淺。人老當時。知有待君猿鶴。何堪似此分離。竭來只怕。月明千里。後夜相思。

の一関を賦して、その行を送つた。

云々と述べられている。張滋昉の七絶は「鷗夢新誌」に載せられたものであろうが、現在のところ確認できていない。その詩は「世外將に世上の人と為らんとす。多年の蟻屈一朝伸ぶ。未だ風雲の会に際せずと雖然も、已に覺ゆ胸中万象の春」と訓じ、《世外》は、ふつう世俗の外という意だが、ここでは中国の外つまり日本を指して言う。ちなみに鄭孝胥が神戸で詠じた七絶に「流落中年仍ほ世外、梅

花数点中原を憶ふ」(『日記』光緒二十年一月六日の条) というのも同様である。また〈風雲の会〉は、明君或いは時運に際会して己が才能を発揮する意。例えば、魏・王粲の「雜詩」に「風雲の会に遭遇し、身を鸞鳳の間に託す」とある。槐南の評語は、〈惜君〉から〈草頭露〉まで、『唐詩選』にも収められている杜甫の「孔巢父の病を謝して江東に帰遊するを送り、兼ねて李白に呈す」詩の一節をそのまゝ用いたもの。〈苦死〉は懸命にの意で、口語的表現。神田博士によれば、竹溪の「望雲間」詞は「僻調」で、「惡趣味」だということになるが、とりあえず訓じておく。「帰らないで、心は去留に在り。言に帰らないで。既に心を形の役と為す。惆悵して悲しむ。実に昨は非にして今は是なるを覚る。吾が生已んぬるかな何くに之かん。壺觴を引いて自ら酌み、樂しみて憂ひを消す、天命奚ぞ疑はん。／人間の富貴、世上の風雲、言ふ莫かれ際会機無しと。槎蓬萊の清浅に泛ぶ、人老ゆ当時。君を待つ猿鶴有るを知るも、何ぞ堪へん此の似き分離に。竭来只だ怕る、月明千里。後夜相思ふ」。〈猿鶴〉は、隠士の伴侶。〈竭来〉は、発語の辞。

なお、作られた時期はよくわからないが、長岡雲海に「春日賦して張先生に贈る」と題する七律があり、張滋昉の人となりが見えるので、次に挙げておく。

纔罷吟癡復酒顛　纔に吟痴を罷めて復た酒顛  
不妨人喚作頑仙　妨げず人喚びて頑仙と作すを  
細翻棋譜消春晝　細かに棋譜を翻して春晝を消し  
間檢茶經廢午眠　間に茶經を檢して午眠を廢す  
蓬島尋盟聯舊誼　蓬島　盟を尋めて旧誼を聯ね  
苔岑結契有前緣　苔岑　契を結んで前縁有り  
才高命蹇詩偏健　才高くして命蹇し詩偏に健なり

腹笥何曾讓孝先　腹笥何ぞ曾て孝先に讓らん  
〈頑仙〉は、仙人の初心者。〈茶經〉は、中唐の陸羽が著した茶に關する本。〈尋盟〉は、『左伝』哀公十二年に見える語で、旧盟をあたためる意。〈苔岑〉は、晋・郭璞の「溫嶠に贈る」詩に「人も亦た言有り、松竹に林有り、爾が臭味に及んで、苔を異にし岑を同じくす」とあるのに基づく語で、志向を同じくする友をいう。〈腹笥〉は、腹中の本箱の意。後漢・邊韶(字は孝先)の故事(『後漢書』邊韶伝、「蒙求」卷中)。

帰国後の張滋昉は上海に留まり、わずか一年余りにして彼の地で歿した。明治三十三年(一九〇〇)十二月一日、東京の新聞「日本」『朝日』「萬朝報」「二六新報」等に死亡記事が出たが、そのうち「日本」の〈雜報〉欄には、次のように報じられている。

●張滋昉氏の逝去　明治初年の頃より本邦に渡來し久しく帝國大學の教授たりし張滋昉氏は昨年中本國へ歸りたるが去る二十一日上海に於て死去し我が小田切領事等友人として盡力し葬送せる由

ここに名の挙がっている小田切領事は、上海總領事代理の小田切萬壽之助(一八六八―一九三四)のこと。米沢藩儒小田切盛徳(明治十八年歿。宮島誠一郎の詩に出てくる小田切子敬はこの人のことか)の子で、興亜会支那語学校や東京外國語学校において張滋昉に就いて学んだうちの一人であった。明治三十三年と言えば、清朝では光緒二十六年にあたり、義和團鎮壓のため八ヶ国連合軍が北京を陥れた多事多難の年である。死因は不明ながら、おそらくはそれまでの過度の飲酒が祟った上に何かと心労が重なったものであろう。時に享年六十二。なお、その五年後の明治三十八年一月三十日に副島種臣が七十八歳で歿した。

その後、張滋昉のことは明治三十七年五月吉川弘文館から刊行された難波常雄・早川純三郎・鈴木行三編『支那人名辞書』に「久しく日本に客遊す。光緒二十六年病んで上海に卒す」と記されているのみで、鱗澤氏も指摘されるように、現在わが国や中国で刊行されている各種人名辞典の類にその名を見いだすのは困難である。近年刊行された関捷・譚汝謙・李家巍主編『中日関係全書』（遼海出版社、一九九八年）にも全く言及されていない。

さりながら、実は当時、張滋昉の死を悼み、その人となりをゆかしく懷う者がいたのである。誰あろう、かつて文科大学で張滋昉から北京語を習った選科生田岡嶺雲がその人に他ならない。嶺雲は明治三十四年一月一日刊の「日本人」第二三〇号に「張滋昉氏を懷ふ」と題する一文を載せた。

明治二十四、五、六の交張氏大學に清語を授く予亦當時業を氏に受けたり予が清人と接し清語を習ひたる實にこれを初とす是れを以て予は張氏を懷ふ

清人にしてよく邦語を操り邦文を解し羽織を着け袴を着け其國の食を以て腥膻を吃するにたへずとし其國の住を以て汚穢處るにたへずとなす是を以て予は張氏を懷ふ

清人慨ね錢に吝也而して張氏は錢を愛まざる人の書をこふものある即ち一揮して與へ、また潤筆料を説かず今や邦人にして無爵のものゝために書を作らずといふ者あり是を以て予は張氏を懷ふ

張氏善く罵る嘗て渡邊洪基氏が何社長何會長其肩書累々として徒に多きを罵り又天長節の夜會絹帽燕尾服の人が食を爭ふ餓鬼の如きを罵りたるを記す是を以て予は張氏を懷ふ

張氏善く飲む李經芳氏の我邦に公使たるや李氏張氏をして邦語

を在東京の書生輩に授けしむ

張氏一夜此を拉して新橋に豪興す風流此の如し是を以て予は張氏を懷ふ

日清戰役の當時、清語を習ふもの一時頓に多し而して清人多く國に回りに張氏ひとり留まれるを以て張氏を請ふて師とする者甚だ多し予等同人當時東亞學院を勸立し開校の式を斯文學會に擧ぐ一時の名流悉く臻れり式終りて宴に移れる時島田重禮氏卒然張氏を顧み兩指を以て輪形を爲り此が儲かるだろうと張氏微笑答ふる所なし是を以て予は張氏を懷ふ

張氏生理に拙、當時の如き得る所亦寡からず而して一貧舊の如し環堵蕭然是を以て予は張氏を懷ふ

清人の人と交る多く城府を設けて輕しくゆるさず張氏は即ち磊落飾らず洒然挾む所なし是を以て予は張氏を懷ふ

西太后再び垂簾し皇帝復政を親にせず清の國事日に非ならんとす張氏國を憂ふるの至誠禁ずる能はず慨然老軀を起して國に歸る期する所遂げざりきと雖ども是を以て予は張氏を懷ふ

張氏まさに國に歸らんとするや副島伯以下氏のために金を齎して之を贈る齎したるの金は多くして贈られたるの金はこれに足らず恐らくは奸者利を其間に私せるもの歟張氏滬上に於て此の事を以て予に語る予は同胞のために之を耻ぢたり今亦孫對中村氏の事あり是を以て張氏を懷ふ

張氏明治初年より我邦に來り外國語學校商業學校大學校等に清語を授く其功、錄するに足る政府氏に金を贈らんとす氏時に貧洗ふが如し而かも金を受くるを屑しとせずして之を辭せり是を以て予は張氏を懷ふ

去夏張氏の上海に到る予往いて訪ふ氏喜色面に溢れ手を開いて

予を迎ふ雞を煮て酒を呼ぶ氏類然として已に老い龍鍾亦當年の態なし曰ふ、來り訪ふもの稀に無聊慰め難し願くは數々來れと予聞いて爲之に泫然、而して予も亦當時累多く其意に違ふ是を以て予は張氏を懷ふ

一夕友四輩と滬の北里杏花樓に會飲す張氏を請ふ氏疾を推して強いて到る是を以て予は張氏を懷ふ

初め張氏の其國に回る先づ上海に到り而して後北京に入らんとするにありたり而かも北京廷臣張を惡む者あり氏はを以て往く能はず久しく上海に駐まる狐丁零落遂に轆轤の間に逝く是を以て予は張氏を懷ふ

初め張氏滬上に到る常盤舎に寓す、後城内に移る予氏を見るに意あり氏の居る處を知らんと欲してこれを諸人に叩けども得ず遂に復相見ずして予は日本に歸り氏は滬上に逝きたり是を以て予は氏を懷ふ

今年新年、氏猶滬北の常盤舎にあり予は滬南の桂野里<sup>※</sup>にあり相距る一里にして遠し而して氏病軀を勞して予を訪ふて予偶々在らず蓋し氏清人の居の汚穢なるを嫌ひ城内に移ることを欲せず予輩と同じく住むに意ありたるがためなりと後氏を往訪へば氏已に城内に移り遂に其厭へるの處に逝きたり是を以て予は張氏を懷ふ

嗚呼張氏逝けり妻なく子なく友なく落莫狐丁の裡に逝けり悲夫

※桂野里は、桂野里の誤り。ここに後出の東文学社があった。

文中に見える〈李経芳〉は、前出の李経方のこと。明治二十四年一月から二十五年十月まで、駐日公使の任にあった。〈孫対中村の事〉というのは、明治三十三（光緒二十六）年の惠州蜂起の際、孫文から武器の調達を求められた代議士の中村弥六がその費用の大半

を横領した一件。<sup>（注）</sup>中村が残りの金で大倉組より購入したのは全く使用に耐えない廃銃と不発弾であり、そのことを隠蔽するために布引丸沈没事件を引き起こしたとする暴露記事が「進歩党の煽乱家」という見出しで十二月三日の「萬朝報」に出た。〈北里〉は、遊里、飲樂街。〈杏花樓〉は、四馬路（福建路）にあった飯店。

田岡嶺雲が、文科大学時代からの友人で「夜鬼窟」の同人でもあり、ともに明治二十八年四月の東亜学院創設に関わった劍峰藤田豊八（漢学科の第二回卒業生、一八六九—一九二九）の推薦を受けて羅振玉（字は叔纘、一八六六—一九四〇）らが設立した日本語学校、東文学社の教習として上海に渡ったのは、明治三十二年六月七日のこと、翌三十三年五月療養のため帰国するまで、ほぼ一年間彼の地に逗留した。その時に虹口南潯路の日本旅館常盤舎に寄寓していた張滋防のもとを訪れたのである。いったんは我が国に骨を埋める覚悟であったものの、混乱衰微する母国の現状を憂い、やむにやまれぬ思いで病軀をおして帰国した張滋防だが、廷臣に憎まれて北京に戻ることともかなわず、上海旧城内の陋巷で窮死したという。張滋防を憎んだという廷臣が具体的には誰なのか審らかにしないが、日清戦争後の保守的な宮廷では、一民間人とはいえ長年東京に在って広く各界との交流があった張滋防の存在を快しとしなかった者がいたのであろう。その金銭に恬淡とした人柄、磊落で洒脱な一面を懐かしむとともに、善飲善罵のうちに熱誠を有する人として、嶺雲は満腔の同情を寄せている。なお余談ながら、東文学社で劍峰や嶺雲から英書を習った学生の一人が王国維（字は静安、一八七七—一九二七）で、彼は嶺雲の文集にカントやショーペンハウアーの哲学が引用されているのを見て格別の興味関心を抱いたという。嶺雲は上海に渡る前の三月に第一評論集『嶺雲搖曳』を上梓し忽ち版を重ね、続い

てその年の十一月には『第二嶺雲搖曳』を、翌年四月には『雲のちぎれ』を刊行していたのである。

さて、中野逍遙が張滋昉と識り合ったのは、後に掲げる『逍遙遺稿』の序文によれば文科大学に於いてのことであるように読み取れるものの、逍遙の小説『慈淚餘滴』に載せられた己丑十月八日附の緒言に「慈君常に世道の凌夷を嘆じ、重に命ずるに匡濟を以てす」云々と見えていることからして、明治二十二年十月頃にはかなり親密であつたことが窺える。

逍遙の詩文の才は、高等中学で作文を担当していた岡本監輔（号は韋庵、一八三九〜一九〇四。阿波穴吹出身で明治の初年樺太や千島開拓に意欲を燃やした）の既に認めるところであつたが、張滋昉にも知られるようになり、口数の少ない逍遙もこの五十半ばの清国人に心を開き己が習作の幾つかを見せるようになった。張滋昉は逍遙が明治二十二年に百歳で歿した元宇和島藩主春山伊達宗紀を追悼した「春山公挽文」（『逍遙遺稿』正編）に「筆意矯潔、情致纏綿、偉績大節、網羅して遺す無く、允に合作に称ふ」（合作は法度になつた作）と評しているのを始め、二十七年九月正岡子規に寄せた手紙の中に記された「九州感慨十二律」には「吐辞慷慨、音節蒼涼、子美の時を哀しむ諸作に減ぜず」（子美は杜甫の字）という評語を附し、また川崎宏氏の『中野逍遙の詩と生涯——天折の浪漫詩人』（愛媛県文化振興財団、一九九六年）に拠れば、「摧琴の賦」に「哀艷の筆を以て幽怨の思を写す。之を読めば惻惻として人を動かす」と記している。ただし張滋昉は急激な欧化の風潮に抗して孜孜として漢学を学ぶ中野逍遙を奇特とし、彼に常々東洋學術の振興の必要性を説き、それによつて頽唐せる世道人心を匡濟することを期待したのであろう。

逍遙亡き後、漢学科同期の宮本正貫や同選科生の小柳司氣太ら学

友達が編纂した『逍遙遺稿』正外二編に求められて張滋昉は表題及び書扉の文字を揮毫し、次のような序文を寄せた。

中野君、名重太郎。逍遙子、其自號也。爲人沈默寡言、孜孜勤學。當斯時西學盛行、而漢學幾無過問者。獨折節讀書、習爲漢文學。遂以明治二十七年七月卒業、得文學士。其年十一月遭疾而歿。既歿之明年、其親友爲纂其遺稿行之、而屬余爲序之。余初識子於文科大學、每閱其所作、盖嘗以他日將立壇坫許之、於茲數載矣。子死而不及見其成、則天也。夫天之於人、富貴其所不惜、有洩靈祕而擅聲華者、則眞宰若默讎之。以吾觀於世之挾虛名而縻好爵者、陵夸恣傲、睥睨一世、豈不洋洋得志哉。然造物不少靳也。一逍遙子、而遽奪之矣。豈固有幸不幸耶。抑蒼々者、所重將不在彼而在此耶。夫逍遙子已矣。吾將以俟諸不可知者（中野君、名は重太郎。逍遙子は、其の自号なり。人と爲り沈默寡言、孜孜として學に勤む。斯の時に当たつて西學盛行し、而して漢學幾んど過りて問ふ者無し。独り節を折つて書を読み、習ひて漢文學を爲む。遂に明治二十七年七月を以て業を卒へ、文學士を得。其の年十一月疾に遭ひて歿す。既に歿するの明年、其の親友爲に其の遺稿を纂して之を行ひ、而して余に屬して爲に之に序せしむ。余初め子を文科大學に識り、其の作る所を閱す毎に、蓋し嘗に他日將に壇坫に立たんとするを以て之を許す、茲に於いて數載なりき。子死して其の成るを見るに及ばざるは、則ち天なり。夫れ天の人に於ける、富貴は其の惜しまざる所に於て、靈祕を洩らして聲華を擅にする者有らば、則ち眞宰之に默讎するが若し。吾れを以て世の虛名を挾みて好爵を縻ぐ者を觀れば、凌夸恣傲、一世に睥睨す、豈に洋洋として志を得ざらんや。然れども造物少しく靳まざるなり。一逍遙子にして遽に

之を奪へり。豈に固より不幸有らんや。抑そも蒼々たる者、重んずる所は將た彼に在らずして此れに在るや。夫れ逍遙子已めり。吾れ將に以て諸を知る可からざる者に俟たんとす。

〔壇坫〕は文壇。〔真宰〕は、宇宙の主宰者。〔莊子〕齊物論篇に見える語。〔好爵〕は、高い爵位。ちなみに明治二十五年十一月二十九日（光緒十八年十月十一日）の『鄭孝胥日記』に、「張袖海自ら日本を賦する詩を誦す。童呆、好爵を磨ぎ、賈豎、名流に預かると曰ふ有り。甚だ今の日本國中の風に肖る」という。

かつて「江湖散人」と号した晩唐の陸龜蒙は「李賀小伝の後に書す」（『甫里先生文集』卷十八）において、「吾れ聞く、淫りに耽漁する者は之を天物を暴くと謂ふと。天物既に暴く可からず、又た抉摘刻削して其の情状を露はす可けんや。萌卵自り槁死に至るまで、隠伏する能はざらしめば、天能く敢へて罰せんや。長吉の天、東野の竄、玉溪生の官朝籍に掛からずして死す、正に是れに坐りしや、正に是れに坐りしや」と呻いて、李賀（字は長吉）・孟郊（字は東野）・李商隱（号は玉溪生）という詩人達が造化の秘密を解き明かした表現者であったが故に、却ってそれが禍となって夭折・貧窮・不遇といった現世での不幸を招いたのだと嘆息したが、ここもそうした認識と相通するものがある。

以上、中野逍遙が生前深く信頼し、その歿後『逍遙遺稿』に序文を寄せた文科大学漢学科の外国人教師張滋昉について、清国漫遊中の副島種臣との出会いとそれに続く明治十二年の来日から三十二年七月に帰国し翌年十一月上海で客死するに至るまでの間に於ける事跡の一端を垣間見た次第である。調査考証が足らず疎漏な点が多いとはいえ、この名利に恬淡とし虚偽を憎み善飲善罵の内に熱誠を有

した清国人が、副島種臣との交友もさることながら、文科大学で学んだ中野逍遙や田岡嶺雲からその人柄を慕われた極めて異色の存在であったことだけは少なくとも確認できたのではないかと思う。

## 注

- (1) 明治前期に於けるシラー受容については、福田光治・剣持武彦・小玉晃一編『欧米作家と日本近代文学 ドイツ篇』（教育出版センター、一九七五年）所収の鈴木重貞「シラー」および松田穰編『比較文学辞典』（東京堂出版、一九七八年）を参照した。
- (2) 前掲、鈴木重貞「シラー」参照。
- (3) 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第三十五卷（一九七二年）所収の巖谷小波の著作年表を参照。
- (4) 明治十九年（一八八六）、父の五郎に宛てた「寒氣相増候処益々御勇敷被遊御暮奉賀候」と始まる手紙の中で、「独逸学相始メ課業追々多忙ニ相成申候」と報じている。川崎宏編『中野逍遙書簡』（岩波書店「文学」一九六六年一月号）。
- (5) 村山吉廣「中野逍遙」（『漢学者はいかに生きたか―近代日本と漢学』所収）。
- (6) 笹淵友一「『文学界』とその時代下」第十章 中野逍遙。
- (7) 拙稿『逍遙遺稿』札記「故郷の恋人のこと他」（『相山女学園短期大学部二十周年記念論集』、一九八八年）及び『逍遙 遺稿』札記「狂痴詩其六について」（『相山女学園大学研究論集』第二十三号第二部、一九九二年二月）。
- (8) 中野逍遙が『情史』や『燕山外史』を愛読していたことについては、拙稿『逍遙遺稿』札記「才子佳人小説との関わりをめぐって」（『相山女学園大学研究論集』第十八号第二部、一九八七年三月）で既にこれを指摘した。
- (9) 西尾幹二「ショーペンハウアーの思想と人間像」（『世界の名著続

- 10 ショーペンハウアー」中央公論社、一九七五年）参照。
- (10) 『病中放浪』（玄黄社、一九一〇年）所収の「豆南の客舎より」。本書は二〇〇〇年に嶺雲生誕百三十年を記念して西田勝氏の解説を附して復刻された（不二出版発売）。
- (11) この時期の文章は、西田勝編『田岡嶺雲全集』第一巻（法政大学出版局、一九七三年）に収録されている。
- (12) 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第五十四巻（一九八三年）の井上哲次郎の項参照。
- (13) ちなみに、西田幾多郎「明治二十四五年頃の東京文科大学選科」（岩波書店「図書」昭和一七年十二月、第十二巻、後に『西田幾多郎全集』第十二巻所収）には、「私共の三年の時に、ケール先生が来られた。先生はその頃もう四十を越えて居られ、一見哲学者らしく、前任者とコントラストであつた。最初にショーペンハウエルについて何か講義されたやうに記憶して居る」と回想されている。
- (14) 曾根俊虎については、黒龍会編『東亜先覚志士記伝』および東亜同文会編『対支回顧録』に略伝が見える（いずれも復刻版あり。原書房、一九六八年）。専論には佐藤茂教「興亜会創設者曾根俊虎の基礎的研究」（『聖徳学園短期大学研究紀要』第十八号、一九八五年）がある。興亜会との関係については六角恒廣「中国語学習余聞」（同学社、一九九八年）の「興亜会と興亜学校」が参考になる。さらに草森紳一「薔薇香處」統——副島種臣の中国漫遊——（『文學界』二〇〇〇年三月号）にも曾根俊虎について言及されている。ちなみに、草森氏の論考は従来その詳細がわからずにいた副島種臣の清国漫遊の経緯や足跡を丹念に辿りながら、その心事を解明されようとしたもので、『文學界』二〇〇〇年二月号より同誌に連載中である。
- なお、明治十六年二月に成島柳北の序文を冠して續文館から刊行された曾根俊虎の『清国漫遊誌』には、文中所々自作の詩と張滋昉の評を載せている。現在、小島晋治監修『明治中国見聞録集成』第一巻（ゆまに書房、一九九七年）に収録。ちなみに、その第二巻には
- 同じく曾根俊虎の『北支那紀行』（前編明治八年、後編明治九年）を収む。
- (15) 副島種臣の清国漫遊については、前掲、草森紳一「薔薇香處」副島種臣の中国漫遊——参照。ほかに山口勝朗「清国漫遊の跡を辿って」（『墨』四十一号、特集副島蒼海、一九八三年三月）がある。大橋昭夫「副島種臣」（新人物往来社、一九九〇年）には清国での足跡に触れて、「副島は、住居を上海の郊外の浦東に定めたというが、そこばかりにとどまらず、蘇州、嘉興、杭州の各地に出かけ、時には揚子江をさかのぼって武漢まで足を伸ばしたらしい」という。
- (16) この記事は、『興亜公報』第一輯（明治十三年三月二十四日）に載せられた渡辺洪基（一八四八—一九〇一。当時、興亜会副会長。後に明治十九年三月から二十三年五月まで帝国大学総長を務めた）の興亜会創立大会における演説とともに、伊東昭雄編著『思想の海へ「解放と変革」①アジアと近代日本—反侵略の思想と運動』（社会評論社、一九九〇年）「第一部大アジア主義の形成とアジア民間交流」にも収録されている。
- (17) 佐々木哲太郎の事跡については、佐々木盛行『中林梧竹—人と書芸術の実証的研究』（西日本文化協会、一九九一年）の「佐々木哲太郎をめぐる副島種臣と梧竹」に詳しい。
- (18) 長尾雨山が副島種臣の知遇を得たのは明治二十一年・二十二年頃であつたらしい。新聞の漢詩欄に載つた雨山の作を見て、蒼海がその存在を知り国分青厓を通じて訂交するに至つたという。このこと、杉村邦彦「長尾雨山とその交友⑦」（『墨』第122号。芸術新聞社、一九九六年）参照。
- (19) 鄭子瑜・実藤恵秀編校『黄遵憲與日本友人筆談遺稿』第四卷第二十八話（早稲田大学出版会、一九六九年刊）。なお、さねとうけいしゅう編訳『大河内文書—明治日中文化人の交遊』（平凡社東洋文庫、一九六四年）「七 曾根俊虎」の章にも張滋昉の名が見える。ちなみに、それに拠ると大河内輝声や石川鴻斎らは曾根俊虎と全く肌



が合わなかったようで、その詩も認めていない。

- (20) ついでに言えば、中野逍遙は大学予備門時代に三島中洲から作文の指導を受けたことがある。明治二十三年五月十八日附 父宛ての書簡に「別紙文章二篇相送申候御覽被下べく漢文の方ハ三島と申文章家の評及び他二人漢学者の批評和文の方ハ久米と申歌よみの点刪に御坐候」と見える（前掲、川崎宏編「中野逍遙書簡」）。

- (21) 一方、漢文で書かれた『墨水別墅雜録』（今井源衛校訂、吉川弘文館、一九八七年刊）では、明治十七年五月十八日の条に張神海の名が見えるが、神は袖字の誤りであろう。

- (22) 『遯月樓存稿』全五冊（大正八年刊）のうち第一冊所収。他に藍田の明治十五年作「壬午九月、関根痴堂、居を墨江に移す。成島柳北と北隣す。詩有り。柳北之に和す。余蟹に倣ひて寄贈し、兼ねて柳北に似す」詩（同上）にも、張滋昉の評語がある。なお、関根痴堂は癡堂居士と号した三河豊橋出身の関根柔（二八四〇～一八九〇）のこと。

- (23) 黒木彬文「興亜会・亜細亜協会の活動と思想」（復刻版『興亜会報告・亜細亜協会報告』第一巻解説）に拠る。

- (24) 興亜会の支那語学校で張滋昉について学んだ一人に宮島詠一郎号は栗香（一八三八～一九一一）の子、詠士宮島大八（一八六七～一九四三）がいる。この人は明治二十年に中国に渡り、ほぼ七年間（曾門の四大弟子）の一人で桐城派の文人張裕釗（字は廉卿、一八二三～一八九四）に師事した。明治二十八年二月に張滋昉の後任として帝國大学の支那語教師（三十一年まで）となり、自宅に詠帰舎（後の善隣書院）を開いて中国語教育に大きな足跡を残した。宮島の留学については魚住和晃『宮島詠士「人と芸術」』（二玄社、一九九〇年）があり、中国語教育者としての足跡については六角恒廣『漢語師家伝——中国語教育の先人たち——』（東方書店、一九九九年）の第五章（宮島大八——善隣書院と「急就篇」）がある他、村山吉廣、前掲書にも（宮島大八——大陸とのかけはし）の章がある。

- (25) 張滋昉の詩は、次の如くである。

- |         |                  |
|---------|------------------|
| 東風爛漫正韶華 | 東風爛漫 正に韶華        |
| 雅集園林興信嘉 | 園林に雅集して興信に嘉し     |
| 已坐元龍樓百尺 | 已に坐す元龍が百尺の樓      |
| 更傾文學酒千車 | 更に傾く文學が酒千車       |
| 無邊春色深如海 | 無邊の春色 深きこと海の如く   |
| 彌望櫻花燦似霞 | 弥望の桜花 燦として霞の似し   |
| 既醉莫嫌歸路晚 | 既に酔ふて歸路の晚きを嫌ふ莫れ  |
| 一輪皓月照檐斜 | 一輪の皓月 檐を照らして斜めなり |
- （韶華）は、美しい春景色。（元龍）は、魏の陳登の字。誠実でさっぱりとしており、沈着で思慮深く大略を有していた。許汜と劉備とが荊州の劉表のもとで、天下の人材を論じた際、許汜が陳登を傲慢で主客の礼をわきまえずさつさと本人は大きな牀（寝台）に寝て客たる自分を牀下に寝かせたと非難したのに対して、劉備が許汜をたしなめ、自分なら百尺の樓上に臥し、君を地べたに寝させたいと思う、寝台の上下の違いどころではないと言ったという（『三国志』巻七、魏書、陳登伝）。（文學）は、後漢末の孔融の字。曹操が出した禁酒令に反対し、「坐上客恒に満ち、樽中酒空しからざれば、吾れ憂ひ無し」と言ったという（『後漢書』巻七〇、孔融伝）。（弥望）は見渡すかぎり。『文選』巻二、張衡の「西京の賦」に見える語。
- (26) 『雲海詩抄』巻下や『雲海詩抄続編』巻下に見える「張先生」というのは、張滋昉のことであろう。そのうち、明治二三・四年頃の作と思われる「張先生に贈る」詩には、
- |         |              |
|---------|--------------|
| 不圖瀛海久相逢 | 図らずも瀛海久しく相逢ふ |
| 十載交際每過從 | 十載の交際 毎に過從す  |
| 學問淵源承道統 | 學問淵源 道統を承け   |
| 文章風義仰儒宗 | 文章風義 儒宗を仰ぐ   |
| 名同天上張公子 | 名は天上の張公子に同じく |
| 才比雲間陸士龍 | 才は雲間の陸士龍に比す  |

大好光陰原逆旅

大に好し光陰 逆旅を原ぬること

何妨蓬島寄仙蹤

何ぞ妨げん蓬島 仙蹤を寄せるを

と詠じられている。第五句は、杜甫の「翰林張四學士垣に贈る」詩の「天上の張公子、宮中漢客星」に基づく。第六句は、西晋・陸機（字は士龍）が「雲間の陸士龍」と称したのによる（『世說新語』排調篇『蒙求』卷上）。第七句は、李白「春夜桃李の園に宴するの序」の「天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客なり」を踏まえる。この詩には、社交辞令もあつてか溢美の言が多用されている。

なお、長岡雲海の漢詩集として別に明治二十一年刊の『長雲海詩草』上下二冊があり、また二松學舎大学附属図書館には「長雲海詩草」上中下三冊を所蔵する。後者は刊行年不明ながら、上は甲子起辛未止、中は辛未起庚辰止、下は庚辰起癸未止、即ち元治元年（一八六四）から明治十六年（一八八三）までの作が収められている。両著ともほとんど毎篇にわたつて張滋昉ほか清人の評が附されている。

(27) 「王定国の晋卿が酒を得て相留めて夜飲するに次韻す」詩（『蘇文忠公詩合註』卷三十一）。また「喬將に行かんとし、鵝鹿を烹、刀剣を出して以て客に飲ましむ。詩を以て之に戯る」と題する作（卷十四）には「便ち先づ報恩子と呼ぶ可し、仍ほ醉郷公を帶ぶるを妨げず」と見える。

(28) 佐々木盛行氏の前掲書「梧竹作品の評価」には、著者架蔵の「明治二十三年ごろ張滋昉から梧竹にあてた文翰」が写真版で示されており、参考までに読み下して次に挙げておく。

漢魏周秦至古初

漢魏周秦より古初に至る

臨摸殆偏更心虛

臨摸殆ど偏く更めて心虚なり

殘碑斷碣積千軸

殘碑斷碣 積むこと千軸

墨水成池樂有餘

墨水池を成し楽しみ餘り有り

梧竹山人雅に八法を善くし、尤も碑帖を喜ぶ。前に禹域に遊び、至る所搜羅す。故に獲る所の六朝以上の旧帖甚だ富む。今携へて

東都に至り、副島一一學人を經。先生賞鑑して貽るに詩を以てす。余も亦た韻を次ぎ、奉つて彙正に博す。

弟張滋昉

種臣の詩は、「梧竹至る。共に賦す。八首」其三（全集卷三）で、次の如く詠じられている。

梧竹先生習字初

梧竹先生字を習ふの初め

搨摸天下鼎鐘虛

天下に搨摸して鼎鐘虚なり

遂將成卷稱多在

遂に卷を成すを將て稱多く在り

即擬等身猶有餘

即ち擬す等身猶ほ餘り有るを

佐々木氏は張滋昉の書簡を明治二十三年ごろの作とみなしておられるが、一方で、種臣の「梧竹至る。共に賦す」詩の第二首については明治十六年の作とする（前掲書「梧竹を巡る（忘れ得ぬ人々）」政治家・副島種臣）。けだし種臣の詩は明治十七年七月、梧竹が東京にやつて来て間もない頃の作とみるのが妥当で、張滋昉の詩もその時に作られたのではなからうか。

(29) ちなみに、末広鉄腸は『逍遙遺稿』刊行に際して、序文を草することになつていたが、入院中のため果たせなかった。その間の事情について、『逍遙遺稿』に添附された「発起人賛成者及出版義捐金額」一覧表の附言に、次のように云う。

末廣衆議院全院委員長發起人トシテ助力ヲ與ヘラレシコト少カラズ且病間ヲ以テ序文ヲ草スルコトヲ約セラレシニ宿痾未ダ快カラズ今秋來第二醫院ニ於テ治療中ナリ故ヲ以テ遂ニ之ヲ得ル能ハズ殊ニ遺憾トス

(30) 鉄腸の「病起」詩は、次の如くである。

誰意枯枝又着花

誰か意はん枯枝に又た花を着けんとは

心期百歲負烟霞

心に期す百歲 煙霞を負ふを

裁衣妻怪腰圍細

衣を裁ちて妻は腰圍の細きに怪しむ

對案兒驚食量加

案に対して兒は食量の加はるに驚く

喜比遺珠還入手

喜びは遺珠の還た手に入るに比し

情同逐客再歸家 情は逐客の再び家に帰るに同じ  
 自今疎懶任人笑 今自り疎懶 人の笑ふに任す

畢竟餘生添足蛇 畢竟餘生 添足の蛇

(31) 他に、管見では長岡雲海や福井学圃（二八六八～一九一八）にも送別の詩がある。

(32) 二松學舎大学附属図書館所蔵本に拠った。一九九二年に貴州人民出版社から刊行された『黎星使宴集合編』には、この「己丑謙集謙集續編」は収録されていない。

(33) 吉川幸次郎『中國書畫話』解説（筑摩『全集』では第十七巻）に見える。なお、わが国で鄭孝胥の詩を論じたものに狩野直喜『海藏樓詩を讀む』（大正十二年「藝文」第十四号第三号／後にみすず書房一九七三年刊『支那學文叢』所収）があり、その後、今関天彭『近代支那の學藝』（民友社、一九三一年）、倉田貞美『清末民初を中心とした中国近代詩の研究』（大修館、一九六九年）にも論及されている。

(34) この他、幾つか興味深い話柄を紹介しておく。

光緒十七年十月十七日（明治二十四年十一月十六日）の条に、「宮島（誠一郎）は態度がとんでもないが、しばらくして張袖海がやってくる、すっかりそわそわして、ちよつと腰掛けていただけですぐに帰ろうとした。思うに宮島は素より華人との交際で知られているが、画は中国公使の描いたもの、詩もみな黄公度や沈梅史等の代表作である。張袖海がその間の事情を残らず知っているため、張を見ると憎気返るのだ」とあり、鄭孝胥は栗香と反りが合わなかったものか、あるいは何か別に理由があるのか、極めて底意地の悪い見方をしている。これより先、九月十七日（十月十九日）の条には洋烟（阿片）の話が見え、「張袖海が言うに若い頃に洋烟を吸っていたことがあるが、今は断つて十七年になる」とある。ついで十一月廿二日（十二月二十二日）の条に「一夜、袖海が来て話す」とあり、そこで張が「酒を飲むとむかつ腹が立つて、よく人を面罵する」と言

えば、鄭が「君は旧家の子弟だから、怒りつぱく剛直で阿らない質なんだ」云々と答えている。なお十月廿四日（十一月二十五日）および十一月十四日（十二月十四日）の条からは、当時張滋訪に日本人の妻がいたことが知られる。

年が改まって光緒十八年閏六月廿三日（明治二十五年八月十五日）の条に、「昨日、欽差大臣（公使の李経方のこと）と話した際、ついでに張袖海のために頼んでおいた。曰く、学堂の漢教習は本来緊急を要するものではなく、張の性格は矜傲寡合で、恐らくは汪公（汪鳳藻）が赴任してくると、皆から爪弾きされて、除け者にされてしまいかねない。張は世家の子弟で異域に流落し、公使館で面倒を見なければ、体面を傷つけてしまう、ましてや副島・榎本らの推薦であるから、途中でやめてしまうのは、なんとも面目が立たぬ。大臣が彼の本意を汪公によしなに取り次いで下されば、きっと人事異動はない。どうかくれぐれもよろしく」云々と見え、鄭孝胥が張の処遇を気に掛けている様子が窺える。

張滋訪と副島種臣との関係は本文中に述べたが、副島の後を受けて興亜会の第四代会長（明治十四年十二月～十五年十一月）になったのが榎本武揚（一八三六～一九〇八）で、その時に張滋訪との交際が生じたものと思われる。（学堂）というのは、公使館に附設されていた東文学堂のことであろう。光緒十九年五月から九月にかけて来日した黄慶澄（字は愚初）の『東遊日記』（清・王錫祺輯『小方壺齋輿地叢鈔』所収）に見える。張滋訪は公使館の雇員として日本語を教えていたのである。もっとも、この『東遊日記』には、張滋訪についての言及はなく、汪公使の時には雇いを解かれていたようだ。さらに光緒十八年十一月二十日（明治二十六年一月七日）の条に拠れば、森槐南が『鷄林詩選』に題した絶句の中に、「乾嘉の詩格已に頽殘、降つて咸同に及べば觀るに耐えず。此の如き中原愧じること無きや否や、遼東の属国旧衣冠」と、中国では咸豐・同治以降の詩に見るべきものがないと批判しているのを知って、鄭孝胥は伊藤

博文に随行して大磯に滞在中の槐南に皮肉を込めた反論の手紙を送っている。ついで廿四日（二月十一日）の条には、槐南と同行してその文面を見せられた野口麟斎（寧斎の誤まりであろう）が袖海のもとにやって来て、君の筆になるものではないかと訊ねたという後日談が載せられている。

- (35) 明治二十二年頃の作「張滋昉・宮島誠並に草堂を訪はる」詩（『全集』巻四）。宮島誠は、宮島誠一郎のこと。

- (36) もっとも、蒼海の「張滋昉先生に答ふ」四首其三（『全集』巻三）には、秦檜に憎まれて永州に貶せられた南宋・張浚の令孫だという。

- (37) 前掲、吉川幸次郎「『中國書畫話』解説。鄭孝胥と長尾雨山との関係については、樽本照雄『初期商務印書館研究』（清末小説研究会、二〇〇〇年）に詳しい。『鄭孝胥日記』光緒十八年十月十五日（明治二十五年十二月三日）の条には、長尾雨山・張袖海とともに両国の料亭亀清樓にあり、芸妓を呼び詩を賦した記事が見え、「子野歌を聞きて奈何と喚び、二君の句亦た人を感じしむること多し。蘇龕今夕君が為に酔ひ、両国橋頭月下過ぐ」と詠じている。ちなみに、『子野』云々は、『世説新語』任誕篇に「桓子野（尹）清歌を聞く毎に、輒ち奈何と喚ぶ。謝公（安）之を聞きて曰く、子野一往に深情有り」とあるのを踏まえる。

- (38) 三浦叶「明治漢文學史」の中篇第二章「日清戦争と漢詩」参照。なお、そこで野口寧斎を金沢の人とするのは野口犀陽と混同された為であろうか。寧斎は肥前諫早の人である。柳井綱斎については、三浦氏の前掲書、下篇第六章第五節「柳井綱斎・若き稲門の漢詩家」に詳しい。

- (39) 小田切萬壽之助については、『東亜先覚志士記伝』および『対支回顧録』の略伝参照。なお、漢詩集として『銀台遺稿』（一九三六年）があり、その蔵書は「小田切文庫」として財団法人東洋文庫に寄贈されている。

- (40) 宮崎滔天『三十三年の夢』にその間の事情が述べられている。島

田慶次・近藤秀樹校注岩波文庫本（一九九三年）参照。また前辛焯『東アジアのなかの日本歴史9 孫文の革命運動と日本』（六興出版、一九八九年）にも言及されている。

- (41) 夜鬼屈のことは、西田勝編『田岡嶺雲全集』第五卷（法政大学出版局、一九六九年）の「数奇伝」解題を参照。

- (42) 東亜学院については、西田勝編『田岡嶺雲全集』第五卷の「数奇伝」解題を参照。また三浦叶「明治の漢學」第二部第一章「新漢學者（赤門文士）」とその活動」にも言及されている。

- (43) 上海時代の田岡嶺雲について論じたものに、趙雲夢「田岡嶺雲と上海」（西田勝退任・退職記念文集編集委員会「文学・社会へ地球へ」三一書房、一九九六年）がある。後に改題して『上海・文学残像——日本人作家の光と影』（田畑書店、二〇〇〇年）に第一章「或變動」を成し遂げた都市——田岡嶺雲の上海東文学社」として収録。

- (44) 『静安文集統編』自序に「是時社中教師爲日本文學士藤田豊八田岡佐代治二君。二君故治哲學、余一日見田岡君之文集中有引汗徳叔本華之哲學者、心甚喜之」と見える。

- なお、王国維が嶺雲から受けた具体的な影響については、須川照一「王国維と田岡嶺雲」上・中・下（『東方』四十五・四十六・四十七号、一九八四・五年）、竹村則行「田岡嶺雲の境界説と王国維の境界説」（『中国文学論集』第十五号、一九八六年）、岸陽子「田岡嶺雲と王国維——人間詞話をめぐって——」（安藤彦太郎編『近代日本と中国——日中関係史論集』所収、汲古書院刊、一九八九年）などに詳しい。岸氏によれば、王国維は、ショーペンハウアーのみならずシラーの存在を嶺雲の著作から教えられたという。

- (45) 『逍遙遺稿』に冠せられた岡本監輔の序文を読み下して、次に挙げておく。

十許年前、余第一高等中学に在り、生徒の作文を督す。時に中野重太郎有り、伊予の人なり。学を好み漢文に長ず。雄健富贍。儕輩に超越す。尋いで大学に入り、卒業して文学士と爲る。自

ら逍遙子と号す。声名隆隆として日に起こる。余謂へらく異日牛耳を文壇に執る者は、必ず斯の人ならんと。忽ち其の泉下に客と為るを聞く、事は去冬に在り。駭歎惋惜する者之を久しうす。曰く、耆宿漸く彫謝せり。望む所の者は、独り少壮重太郎の如き者有るのみ。而して今此の如し。嗟乎何ぞ天の文章に恕なるや。頃る其の友人橋本夏男宮本正貫等、遺文を刻し、以て同人に頒たんことを相謀る。書を馳せ来りて余に言を徴し、以て巻首に弁す。益ます重太郎學に素養有り、能く交友相信ずの殷なるを致すを感ず、密に文辞卓異なるのみならざるなり。則ち其の人逝けりと雖も、亦た自ら磨滅せざる者有りて存せり。胡んぞ喜びて之に題せざらんや。

ちなみに、この序文を寄せた時、岡本監輔は郷里の徳島県尋常中学校長を務めていた。

(46) 春山は宇和島藩の財政基盤を固め、養子宗城が四賢侯の一人として活躍するのの後顧の憂いならしめたが、旧藩士の子逍遙にとつてもまた格別の存在であった。『逍遙遺稿』に掲げられた「中野文學士小傳」に、

……學士幼にして敏、四歳にして能く管を擲り字を画く。成童にして鶴鳴學校に學ぶ。故有り退きて山本先生に従ひ、彤管の訣を受け、飛走頗る觀る可し。一日軒岐氏松本文哉、學士の作る所の書を視て、大いに之を賞し、即ち春山伊達公に呈す。公も亦た大いに喜び、人をして之を召さしめ、書を賜ひ臨みて以て進ましむ。後以て例と爲す。

とある。〈成童〉は、八歳。〈彤管〉は、もとは『詩經』に見える語で赤い筆筒をいうが、ここでは書法の意。〈飛走〉は、草書の書きぶり、もしくは飛草のことをいうのであろう。〈軒岐氏〉は、医師。春山も頼春水に学び書を善くしたという。なお、『逍遙遺稿』正編には、「春山老公百に満つる遐壽を賀する序」も収められている。

本文では触れなかったが、本田種竹（一八六二—一九〇七）の明治十一年の作に「張袖海を訪ふ。袖海壁に広瀬青村の詩幅を掛く。因つて其の韻に次す」、「藤杖を張袖海に贈る。係くるに一絶を以てす」の二首があること（『懷古田舎詩存』に附された「詩歴」に拠る。但しこれらの詩は『詩存』には収載されておらず、どのような作品か未確認、明治二十四年十二月刊の五高「龍南會雜誌」第二号に載せられた奥平謙輔「贈秋月子錫書」に、中村正直、重野安繹と俱に張滋昉の評語が附されていること（これは松本健一「秋月悌次郎—老日本の面影」作品社、一九八七年に指摘されている）、明治二十四年に東京堂から刊行された紀山松本正純の『訂補作詩訣』に題詞を寄せていること、さらに松枝茂夫「百年前の『紅樓夢』の読者」（『文学』一九八五年九月号、後に『松枝茂夫文集』第一巻所収、研文出版、一九九八年）及び伊藤漱平「日本における『紅樓夢』の流行—幕末から現代までの書誌的素描—」（古田敏一編『中国文学の比較文学的研究』所収、汲古書院、一九八六年）に拠れば、東京外国語学校で張滋昉が『紅樓夢』を講じていたと見られるふしがあることも、ついでに書き添えておく。最後に、張滋昉について、その関連の漢詩文を調べる上で、二松學舎大学附属図書館や早稲田大学中央図書館等にお世話になった。ここに御礼申し上げる。

### 【前稿補訂】

拙稿「逍遙遺稿」札記「落合東郭のこと」（『椋山女学園大学研究論集』第三十一号「人文学篇」、二〇〇〇年三月）に、次のような脱字の箇所があったので、訂正させていただきたい。

一九頁上段 一行目 八月に←八月末に

二六頁上段 一六行目 鬼臉人を嚇す以て←鬼臉人を嚇すを以て

なお、落合東郭に関しては、その後、高橋昌彦「落合東郭—依田学海との交友—」（『雅俗』第四号、平成九年、九州大学文学部国文学研究室「雅俗の会」発行）があることを知った。このことも附記しておく。